

大学教育とジェンダー

— 2017 年関西大学学生の意識調査 —

関西大学人権問題研究室ジェンダー研究班¹⁾

1. はじめに

関西大学人権問題研究室ジェンダー研究班では、これまで2年間を一期として、ジェンダーに関するさまざまなテーマを掲げ、研究活動を行ってきたが、2年間の期ごとの諸テーマとは別に、本研究班は女性問題研究班の時代から一貫して「大学教育と女性」（2008年以降は「大学教育とジェンダー」）をテーマとして研究に取り組んできた。その一環として、2017年10月から11月にかけて「関西大学学生のジェンダー意識調査」を実施した。この報告は、その調査の結果をまとめたものである。

本研究班は、これまでも1987年、1993年、2002年、2008年の4回にわたって関西大学の学生を対象とした意識調査を行ってきた。その結果は、関西大学人権問題研究室紀要16号、29号、47号、58号で、それぞれ報告している。本研究班が「大学教育と女性」を研究テーマとし、学生の意識調査に取り組んだ一つの理由として、長いあいだ関西大学には女性問題やジェンダー問題に関する科目が開設されていなかったということがあげられる。2002年の調査までは、関西大学には女性問題関連科目はなく、ジェンダー研究班の前身である女性問題研究班のメンバーを中心に、2年間という期間限定で開講される「総合コース」という教養科目を利用して、2年ごとに新たな女性問題に関連するテーマを掲げて申請することにより、女性問題を扱う科目を2年間ごと、つないできたのである。このような不安定な形でしか、女性問題を教えることができなかった時期が続いた。し

たがって、恒常的なかたちで女性問題関連科目を開設することは、当時の女性問題研究班の大きな課題であった。そのため、2002年調査までは、女性問題に関わる学生の意識を把握し、その意識のありようを明らかにすることにより、関西大学で女性問題関連科目の恒常的開設が必要であることを示すということが調査の目的の一つであった。

こうした取り組みを積み重ねてきたこともあり、2008年以降、共通教養科目として、「現代社会とジェンダー」が開設され、2008年には同じく教養科目「ジェンダーで読み解く戦争」が開設された。また、各学部でも専門科目として、ジェンダー関連科目が開設されるようになり、2008年調査からは、こうしたジェンダー関連科目を進めていくための基礎資料として学生の意識を把握するという目的が加わった。すなわち、授業において学生たちに何をどう伝え、それを学生たちの気づきにつなげていくのかを考える基礎資料として、学生の意識を把握することが調査の目的の一つになったのである。

今回の調査は、従来からの性別役割分業観に関する設問や、結婚観、自分や結婚相手（パートナー）のライフコースなどの設問に加え、LGBTに対する意識や、戦争観、デートDVの実態に関する設問などを新たに設けた。また、今回の調査では、これまで行っていた郵送による調査に加えて、WEBによる調査も行った。調査に協力してくれた学生のみなさんと、ご助力いただいた大学事務職員のみなさんに感謝する。

2. 調査対象と方法

2017年9月現在の全学部の1年次生と3年次生を対象に、在 student より一定の割合で無作為に抽出し、郵送調査とWEB調査で、それぞれ女性1000人と男性1000人の計4000人を調査対象とした。

調査期間は、督促期間を含めて、2017年10月19日から11月30日である。

3. 回収結果

表 1 回収率

			回収数	調査対象	回収率
郵送調査	1 年次	男 性	168	500	33.6
		女 性	189	500	37.8
		その他	0	—	—
		計	357	1000	35.7
	3 年次	男 性	93	500	18.6
		女 性	163	500	32.6
		その他	0	—	—
		計	256	1000	25.6
総 計		613	2000	30.7	
WEB 調査	1 年次	男 性	59	500	11.8
		女 性	100	500	20.0
		その他	0	—	—
		計	159	1000	15.9
	3 年次	男 性	44	500	8.8
		女 性	80	500	16.0
		その他	1	—	—
		計	125	1000	12.5
総 計		284	2000	14.2	
合 計	男 性	364	2000	18.2	
	女 性	532	2000	26.6	
	その他	1	—	—	
	計	897	4000	22.4	

表 1 は、調査方法と学年、性別ごとに回収率を示したものである。総回収率についていうと、前回調査（2008 年）が 40.7%であったのに対し、WEB 調査を含めた総回収率は 22.7%、前回調査と同じ方法である郵送調査だけをみても 30.7%と、かなり低下している。

性別でみると、どの調査方法でも、どの学年でも、男性の回答が女性の

回収率を下回っている。また、学年別では、どの調査方法でも、男女とも3年次生は1年次生の回収率を下回っている。

とりわけ今回初めて行った、WEBによる調査は、回収率がかなり低い結果に終わった。ただし、すべての調査項目について、郵送調査とWEB調査の結果を比較したところ、優位な差がみられる項目は非常に少なかった²⁾ため、下記は、すべての調査方法を含んだ結果について提示している。

4. 表記について

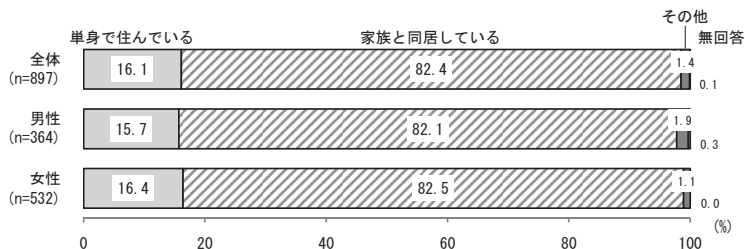
- (1) 図表中のn(Number of case)は、設問に対する回答者数のことである。
- (2) 回答比率(%)は回答者数(n)を100%として算出し、小数点以下第2位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、内訳の合計が計に一致しないことがある。また、一人の対象者に複数の回答を求める設問では、回答比率(%)の計は100.0%を超える。
- (3) 図表中の「MA%」(Multiple Answerの略)という表示は、回答選択肢の中から複数回答形式の質問(「すべてに○」)を示している。

5. 調査結果の概要

問 1. (c) 居住形態

問 1. (c) あなたの今の居住形態は次のどれにあてはまりますか。(○はひとつ)

【図 1c 居住形態】

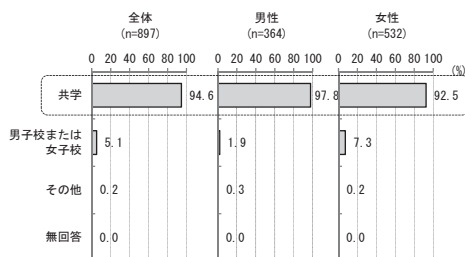


居住形態について、全体では「単身で住んでいる」が16.1%、「家族と同居している」は82.4%となっている。性別でみると、男女差はほとんどみられない。(図1c)

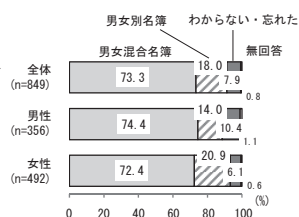
問1. (d) 出身中学

問1. (d) あなたの出身中学は次のどれにあてはまりますか。

【図1d-1 出身中学】



【図1d-2 学級名簿のタイプ】



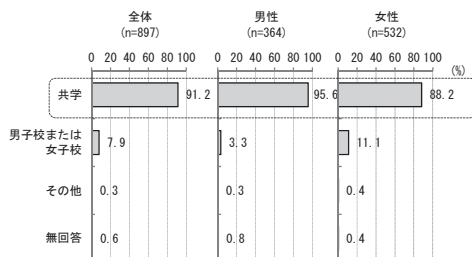
出身中学について、全体では「共学」が94.6%を占め、「男子校または女子校」は5.1%となっている。なお、「共学」と回答した学生に、出身中学の学級名簿のタイプをたずねると、「男女混合名簿」が73.3%を占め、「男女別名簿」は18.0%となっている。

性別でみると、出身中学は、男女とも「共学」が9割台を占めており、「男子校」は1.9%、「女子校」は7.3%となっている。なお、「共学」と回答した学生の学級名簿のタイプは、男女とも「男女混合名簿」が7割台を占めている。また、「男女別名簿」では、男性が14.0%、女性が20.9%で、女性のほうが6.9ポイント高くなっている。(図1d-1、図1d-2)

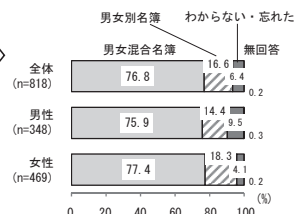
問 1. (e) 出身高校

問 1. (e) あなたの出身高校は次のどれにあてはまりますか。

【図 1e-1 出身高校】



【図 1e-2 学級名簿のタイプ】



出身高校について、全体では「共学」が91.2%を占め、「男子校または女子校」は7.9%となっている。なお、「共学」と回答した学生に、出身高校の学級名簿のタイプをたずねると、「男女混合名簿」が76.8%を占め、「男女別名簿」は16.6%となっている。

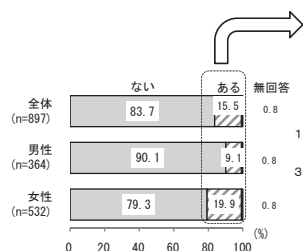
性別でみると、出身高校は、「共学」が男性で95.6%、女性で88.2%となっている。一方、「男子校」は3.3%、「女子校」は11.1%となっている。なお、「共学」と回答した学生の学級名簿のタイプは、男女とも「男女混合名簿」が7割台を占めている。また、「男女別名簿」では、男性が14.4%、女性が18.3%で、女性のほうが3.9ポイント高くなっている。(図 1e-1、図 1e-2)

問 1. (f) 留学や海外での生活経験

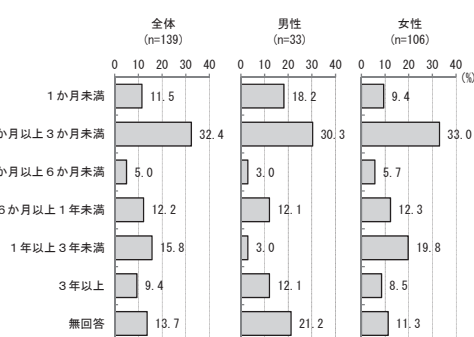
問 1. (f) あなたはこれまでに留学または海外での生活経験がありますか。ある場合には、すべての期間を合わせた年月と、行き先のすべての国名もご記入ください。

留学や海外での生活経験について、全体では「(生活経験が) ある」人が15.5%となっており、生活期間は「1か月以上3か月未満」が32.4%で最も多い。なお、1年以上と回答した人は25.2%となっている。

【図 1f-1 留学や海外での生活経験の有無】



【図 1f-2 生活期間】



性別でみると、留学や海外での生活経験が「ある」男性は9.1%、女性は19.9%で、女性のほうが10.8ポイント高くなっている。なお、生活期間は、男女とも「1か月以上3か月未満」が3割台で最も多いが、男性は「1か月未満」が18.2%で女性（9.4%）に比べ8.8ポイント高く、女性は1年以上と回答した人が28.3%で男性（15.1%）に比べ13.2ポイント高くなっている。（図 1f-1、図 1f-2）

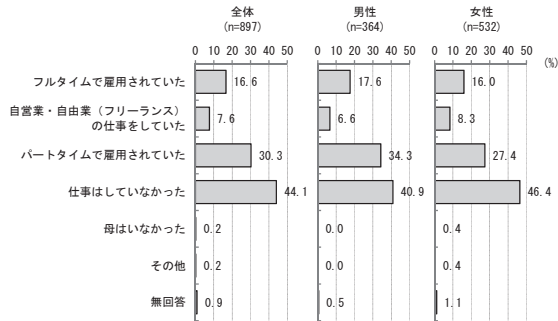
問 2. (a) 小学校低学年のときの母親の就労状況

問 2. あなたのご父母についてお聞きします。それぞれについて、もっともあてはまるもののひとつに○をつけてください。
 (a) 小学校低学年のとき、あなたのお母さんは働いていましたか。(○はひとつ)

小学校低学年のときの母親の就労状況について、全体では「仕事はしていなかった」が44.1%で最も多く、次いで「パートタイムで雇用されていた」が30.3%、「フルタイムで雇用されていた」が16.6%となっている。

性別でみると、男女ともに、母親は「仕事はしていなかった」が4割台で最も多く、女性のほうが5.5ポイント高くなっている。一方、「フルタイムで雇用されていた」と「パートタイムで雇用されていた」は、どちらも男性のほうが高い割合になっている。（図 2a）

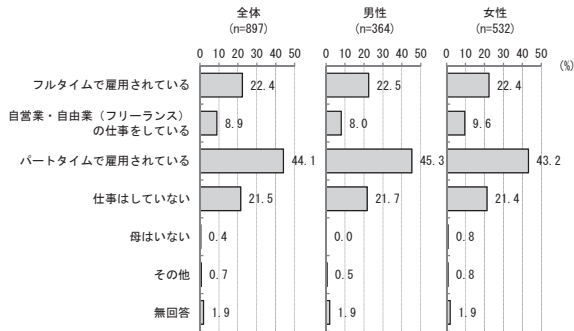
【図 2a 小学校低学年のときの母親の就労状況】



問 2. (b) 現在の母親の就労状況

問 2. (b) 現在、あなたのお母さんは働いていますか。(○はひとつ)

【図 2b 現在の母親の就労状況】



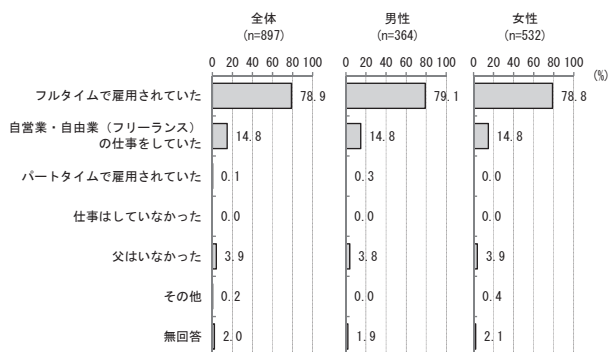
現在の母親の就労状況について、全体では「パートタイムで雇用されている」が44.1%で最も多く、次いで「フルタイムで雇用されている」が22.4%、「仕事はしていない」が21.5%となっている。

性別でみると、男女ともに、母親は「パートタイムで雇用されている」が4割台で最も多く、大きな男女差はみられない。(図 2b)

問 2. (c) 小学校低学年のときの父親の就労状況

問 2. (c) 小学校低学年のとき、あなたのお父さんは働いていましたか。(○はひとつ)

【図 2c 小学校低学年のときの父親の就労状況】



小学校低学年のときの父親の就労状況について、全体では「フルタイムで雇用されていた」が78.9%で最も多く、次いで「自営業・自由業（フリーランス）の仕事をしていた」が14.8%、「父はいなかった」が3.9%となっている。

性別でみると、男女ともに、父親は「フルタイムで雇用されていた」が79%前後で最も多く、次いで「自営業・自由業（フリーランス）の仕事をしていた」がともに14.8%となっている。（図 2c）

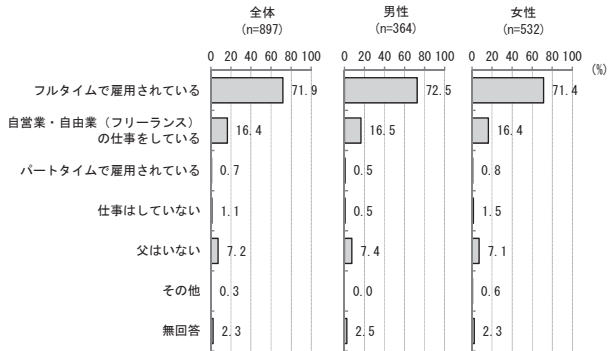
問 2. (d) 現在の父親の就労状況

問 2. (d) 現在、あなたのお父さんは働いていますか。(○はひとつ)

現在の父親の就労状況について、全体では「フルタイムで雇用されている」が71.9%で最も多く、次いで「自営業・自由業（フリーランス）の仕事をしている」が16.4%、「父はいない」が7.2%となっている。

性別でみると、男女ともに、父親は「フルタイムで雇用されている」が72%前後で最も多く、次いで「自営業・自由業（フリーランス）の仕事をしている」が16%台となっている。（図 2d）

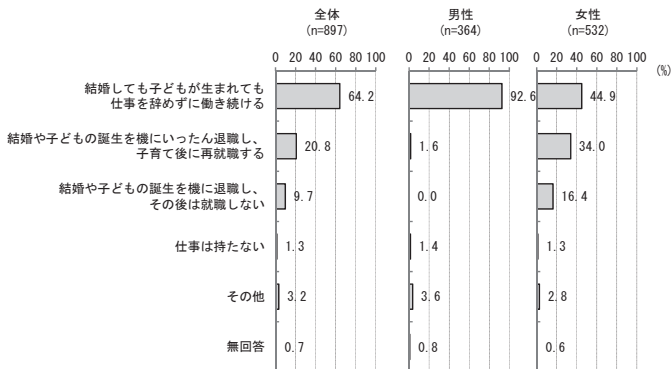
【図 2d 現在の父親の就労状況】



問 3. 大学卒業後の理想のライフプラン

問 3. あなた自身の大学卒業後の理想のライフプランに最も近いものを次の中からひとつだけ選んでください。

【図 3 大学卒業後の理想のライフプラン】



大学卒業後の理想のライフプランについて、全体では「結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに働き続ける」が64.2%で最も多く、次いで「結婚や子どもの誕生を機にいったん退職し、子育て後に再就職する」が20.8%、「結婚や子どもの誕生を機に退職し、その後は就職しない」が9.7

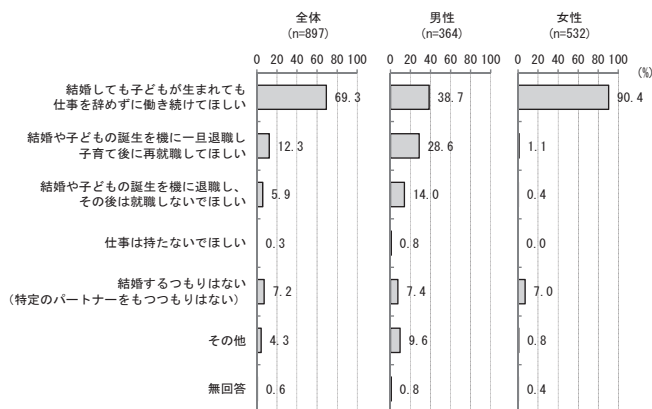
%となっている。

性別でみると、男性は「結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに働き続ける」が92.6%を占めている。一方、女性では「結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに働き続ける」が44.9%で最も多く、次いで「結婚や子どもの誕生を機にいったん退職し、子育て後に再就職する」が34.0%、「結婚や子どもの誕生を機に退職し、その後は就職しない」が16.4%となっている。(図3)

問4. 将来の結婚相手やパートナーに期待するライフプラン

問4. あなたの将来の結婚相手やパートナーに期待するライフプランに最も近いものを次の中からひとつだけ選んでください。

【図4 将来の結婚相手やパートナーに期待するライフプラン】



将来の結婚相手やパートナーに期待するライフプランについて、全体では「結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに働き続けてほしい」が69.3%で最も多く、次いで「結婚や子どもの誕生を機に一旦退職し子育て後に再就職してほしい」が12.3%、「結婚するつもりはない (特定のパートナーをもつつもりはない)」が7.2%となっている。

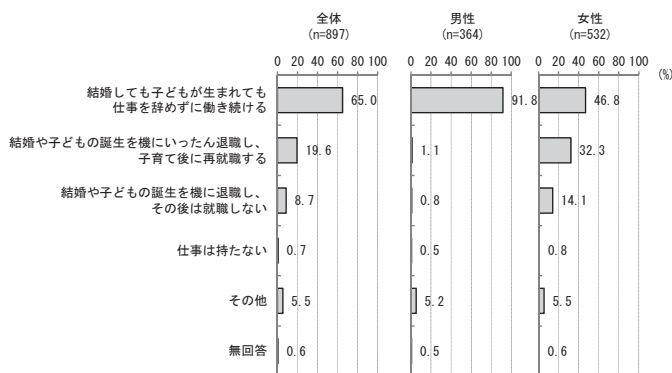
性別でみると、男性は「結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに

働き続けてほしい」が38.7%で最も多く、次いで「結婚や子どもの誕生を機に一旦退職し子育て後に再就職してほしい」が28.6%、「結婚や子どもの誕生を機に退職し、その後は就職しないしてほしい」が14.0%となっている。一方、女性では「結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに働き続けてほしい」が90.4%で最も多く、次いで「結婚するつもりはない（特定のパートナーをもつつもりはない）」が7.0%、「結婚や子どもの誕生を機に一旦退職し子育て後に再就職してほしい」が1.1%となっている。（図4）

問5. 大学卒業後に実際にたどると予想するライフコース

問5. あなた自身が大学卒業後に実際にたどると予想するライフコースに最も近いものを次の中からひとつだけ選んでください。

【図5 大学卒業後に実際にたどると予想するライフコース】



大学卒業後に実際にたどると予想するライフコースについて、全体では「結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに働き続ける」が65.0%で最も多く、次いで「結婚や子どもの誕生を機にいったん退職し、子育て後に再就職する」が19.6%、「結婚や子どもの誕生を機に退職し、その後は就職しない」が8.7%となっている。

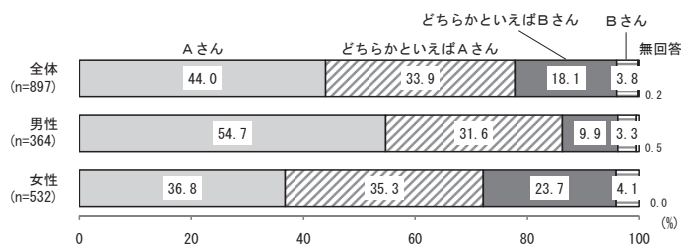
性別でみると、男性は「結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに働き続ける」が91.8%を占めている。一方、女性では「結婚しても子ども

が生まれでも仕事を辞めずに働き続ける」が46.8%で最も多く、次いで「結婚や子どもの誕生を機にいったん退職し、子育て後に再就職する」が32.3%、「結婚や子どもの誕生を機に退職し、その後は就職しない」が14.1%となっている。(図5)

問 6. (1) 性別役割分業観

問 6. (1) あるサークルの合宿で、食事の後片付けを女性だけがやって、男性はテレビやスマホを見たりしていました。そのとき、二人の女子学生が次のように言いました。あなたはどちらの意見に近いですか。(○はひとつ)
 Aさん「女子だけでやるのは、おかしいと思わない? 男子もやるべきじゃない?」
 Bさん「べつに男子にやってもらわなくてもいいんじゃない。私たち女子でできるんだから」

【図 6-1 食事の後片付けについての意見】



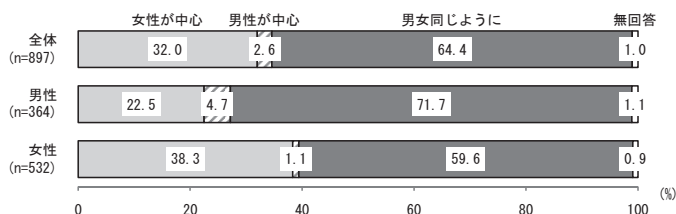
食事の後片付けを女性だけがすることについて、全体では「Aさん (男子もやるべき)」の意見が44.0%で最も多く、次いで「どちらかといえばAさん (男子もやるべき)」の意見が33.9%で、両者を合わせた『男子もやるべき』割合は77.9%を占めている。一方、『男子はやらなくてもよい (「どちらかといえばBさん」+「Bさん」)』割合は21.9%となっている。

性別でみると、男女とも「Aさん (男子もやるべき)」の意見が最も多いが、男性は54.7%、女性は36.8%で、男性のほうが17.9ポイント高くなっている。なお、『男子もやるべき』割合では、男性が86.3%、女性が72.1%となっている。一方、『男子はやらなくてもよい』割合では、男性が13.2%、女性が27.8%で、女性のほうが14.6ポイント高くなっている。(図6-1)

問 6. (2) 実際の性別役割分業

問 6. (2) ところで上の例のような場合、あなたのまわりでは実際には後片付けはどのように行われているのでしょうか。(○はひとつ)

【図 6-2 実際の後片付け状況】



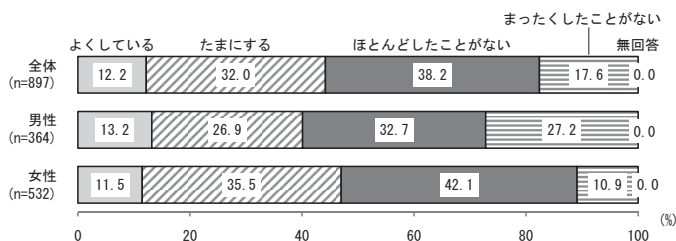
実際の周りでの後片付け状況について、全体では「男女同じように」が64.4%で最も多く、次いで「女性为中心」が32.0%、「男性が中心」が2.6%となっている。

性別でみると、男女とも「男女同じように」が最も多く、男性は71.7%、女性は59.6%で、男性のほうが12.1ポイント高くなっている。しかし、「女性为中心」では、男性が22.5%、女性が38.3%で、女性のほうが15.8ポイント高くなっている。(図 6-2)

問 7. 自身の家事状況

問 7. あなたは次のようなことを普段からしていますか。(それぞれ○はひとつ)

【図 7-1 おかずをつくる】

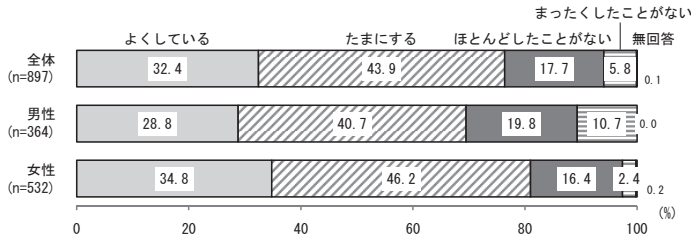


おかずをつくることについて、全体では「ほとんどしたことがない」が

38.2%で最も多く、次いで「たまにする」が32.0%、「まったくしたことがない」が17.6%となっている。なお、『している（「よくしている」＋「たまにする」）』割合は44.2%、『したことがない（「ほとんどしたことがない」＋「まったくしたことがない」）』割合は55.8%となっている。

性別でみると、男女とも「ほとんどしたことがない」が最も多く、「まったくしたことがない」は男性が27.2%で女性（10.9%）に比べ16.3ポイント高くなっている。一方、『している』割合では、男性が40.1%、女性が47.0%で、女性のほうが6.9ポイント高くなっている。（図7-1）

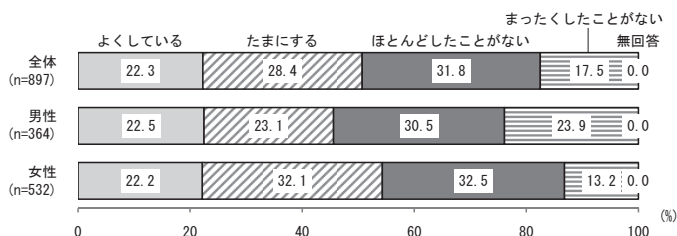
【図7-2 食器を洗う】



食器を洗うことについて、全体では「たまにする」が43.9%で最も多く、次いで「よくしている」が32.4%となっており、『している』割合は76.3%を占めている。一方、『したことがない』割合は23.5%となっている。

性別でみると、男女とも「たまにする」が4割台で最も多く、『している』割合は男性が69.5%、女性が81.0%で、女性のほうが11.5ポイント高くなっている。一方、「まったくしたことがない」では、男性が10.7%で女性（2.4%）に比べ8.3ポイント高くなっている。（図7-2）

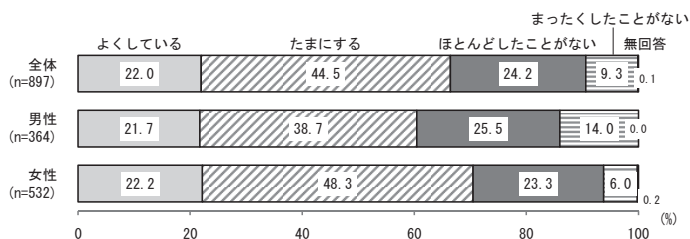
【図7-3 洗濯をする】



洗濯をすることについて、全体では「ほとんどしたことがない」が31.8%で最も多く、次いで「たまにする」が28.4%、「よくしている」が22.3%となっている。なお、『している』割合は50.7%、『したことがない』割合は49.3%となっている。

性別でみると、男女とも「ほとんどしたことがない」が3割台で最も多く、「まったくしたことがない」は男性が23.9%、女性が13.2%で、男性のほうが10.7ポイント高くなっている。なお、『している』割合では、男性が45.6%、女性が54.3%となっている。(図7-3)

【図7-4 掃除機をかける】

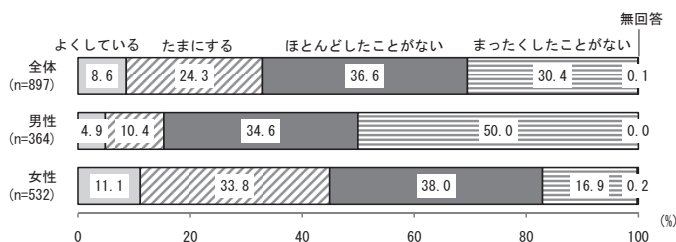


掃除機をかけることについて、全体では「たまにする」が44.5%で最も多く、次いで「ほとんどしたことがない」が24.2%、「よくしている」が22.0%となっている。なお、『している』割合は66.5%、『したことがない』割合は33.5%となっている。

性別でみると、男女とも「たまにする」が最も多く、『している』割合は

男性が60.4%、女性が70.5%で、女性のほうが10.1ポイント高くなっている。一方、「まったくしたことがない」では、男性が14.0%、女性が6.0%で、男性のほうが8.0ポイント高くなっている。(図7-4)

【図7-5 洋服にボタンをつける】



洋服にボタンをつけることについて、全体では「ほとんどしたことがない」が36.6%で最も多く、次いで「まったくしたことがない」が30.4%となっており、『したことがない』割合は77.0%を占めている。一方、『している』割合は、32.9%となっている。

性別でみると、男性は「まったくしたことがない」が50.0%で最も多く、女性は「ほとんどしたことがない」が38.0%で最も多くなっている。なお、『している』割合では、男性が15.3%、女性が44.9%で、女性のほうが29.6ポイント高くなっている。(図7-5)

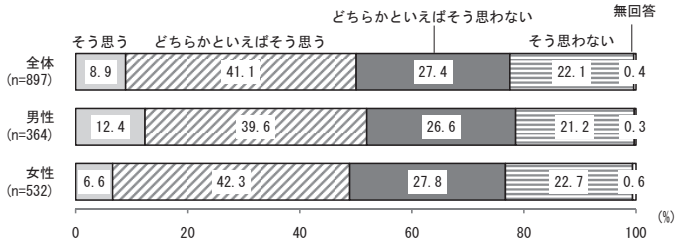
問8. 結婚観

問8. 結婚に関する次のような意見について、あなたはどのように思いますか。それぞれについてあなたの考えにもっとも近い番号ひとつに○をつけてください。

結婚後は夫が外で働き、妻は家庭を守るのが望ましいという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が41.1%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思わない」が27.4%、「そう思わない」が22.1%となっている。なお、『肯定的（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）』割合は50.0%、『否定的（「どちらかといえばそう思わない」＋「そ

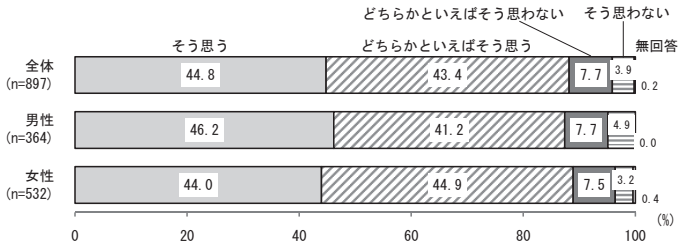
う思わない』割合は49.5%となっている。

【図 8-1 結婚後は夫が外で働き、妻は家庭を守るのが望ましい】



性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が4割前後で最も多く、「そう思う」では、男性が12.4%、女性が6.6%で、男性のほうが5.8ポイント高くなっている。また、男性は『肯定的』割合が52.0%、女性は『否定的』割合が50.5%を占めている。(図 8-1)

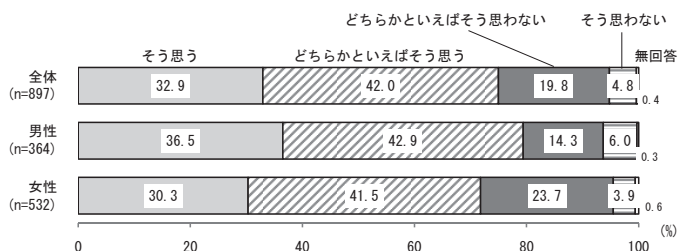
【図 8-2 子どもが小さいうちは、母親が家にいるのが望ましい】



子どもが小さいうちは、母親が家にいるのが望ましいという意見について、全体では「そう思う」が44.8%が最も多く、次いで「どちらかといえばそう思う」が43.4%となっており、『肯定的』割合は88.2%を占めている。一方、『否定的』割合は11.6%となっている。

性別でみると、男女とも『肯定的』割合が88%前後を占めており、大きな男女差はみられない。(図 8-2)

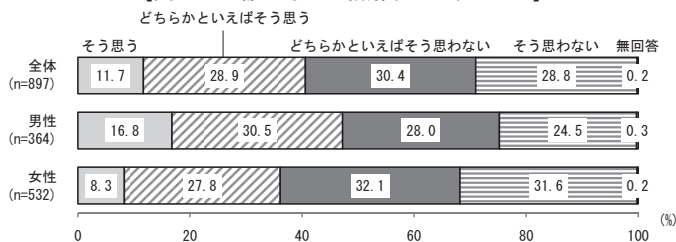
【図 8-3 男性も育児休業や介護休業をとるのが望ましい】



男性も育児休業や介護休業をとるのが望ましいという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が42.0%で最も多く、次いで「そう思う」が32.9%となっており、『肯定的』割合は74.9%を占めている。一方、『否定的』割合は24.6%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が4割台で最も多く、「そう思う」では、男性が36.5%、女性が30.3%で、男性のほうが6.2ポイント高くなっている。一方、『否定的』割合では、男性が20.3%、女性が27.6%で、女性のほうが7.3ポイント高くなっている。(図 8-3)

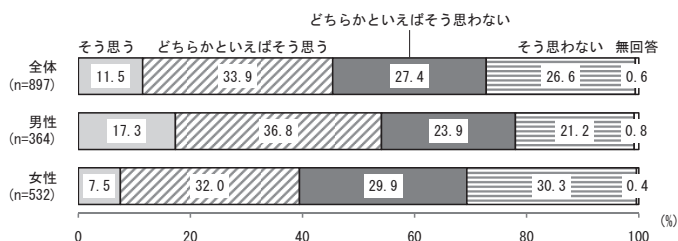
【図 8-4 誰でも人は結婚するほうがいい】



誰でも人は結婚するほうがいいという意見について、全体では「どちらかといえばそう思わない」が30.4%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思う」が28.9%、僅差で「そう思わない」が28.8%となっている。なお、『肯定的』割合は40.6%、『否定的』割合は59.2%となっている。

性別でみると、男性は「どちらかといえばそう思う」が30.5%で最も多く、女性は「どちらかといえばそう思わない」が32.1%で最も多くなっている。なお、『否定的』割合では、男性が52.5%、女性が63.7%で、女性のほうが11.2ポイント高くなっている。（図8-4）

【図8-5 結婚したら、子どもを持つのは普通だ】

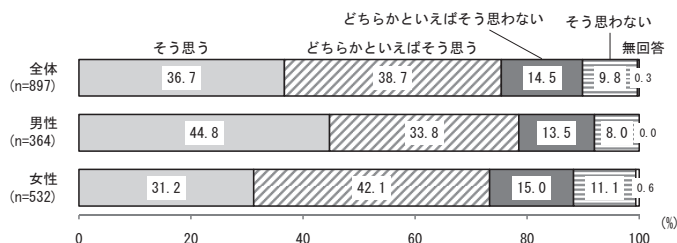


結婚したら、子どもを持つのは普通だという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が33.9%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思わない」が27.4%、「そう思わない」が26.6%となっている。なお、『肯定的』割合は45.4%、『否定的』割合は54.0%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が3割台で最も多くなっている。なお、男性は「そう思う」が17.3%で女性（7.5%）に比べ9.8ポイント高く、『肯定的』割合は54.1%を占めている。一方、女性は「そう思わない」が30.3%で男性（21.2%）に比べ9.1ポイント高く、『否定的』割合は60.2%を占めている。（図8-5）

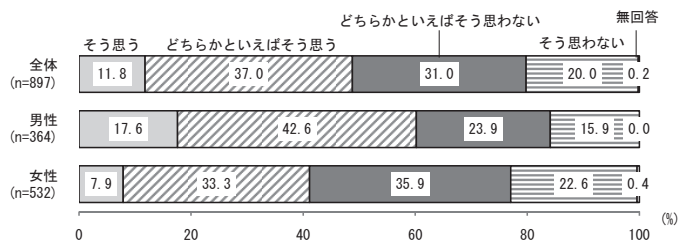
結婚したら、なるべく離婚すべきではないという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が38.7%で最も多く、次いで「そう思う」が36.7%となっており、『肯定的』割合は75.4%を占めている。一方、『否定的』割合は24.3%となっている。

【図 8-6 結婚したら、なるべく離婚すべきではない】



性別でみると、男性は「そう思う」が44.8%で最も多く、女性は「どちらかといえばそう思う」が42.1%で最も多くなっており、『肯定的』割合は男性が78.6%、女性が73.3%を占めている。一方、『否定的』割合では、男性が21.5%、女性が26.1%で、女性のほうが4.6ポイント高くなっている。(図 8-6)

【図 8-7 結婚したら、自分の生き方が犠牲になるのは仕方ない】

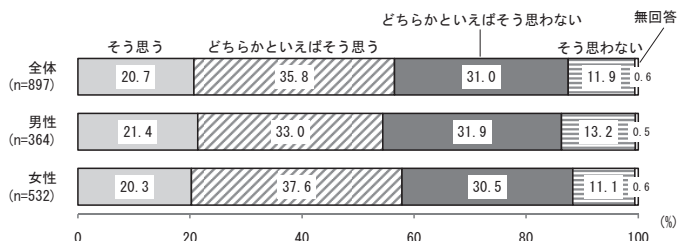


結婚したら、自分の生き方が犠牲になるのは仕方ないという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が37.0%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思わない」が31.0%、「そう思わない」が20.0%となっている。なお、『肯定的』割合は48.8%、『否定的』割合は51.0%となっている。

性別でみると、男性は「どちらかといえばそう思う」が42.6%で最も多

く、「そう思う」が17.6%で女性（7.9%）に比べ9.7ポイント高くなっており、『肯定的』割合は60.2%を占めている。一方、女性は「どちらかといえばそう思わない」が35.9%で最も多く、「そう思わない」が22.6%で男性（15.9%）に比べ6.7ポイント高くなっており、『否定的』割合は58.5%を占めている。（図8-7）

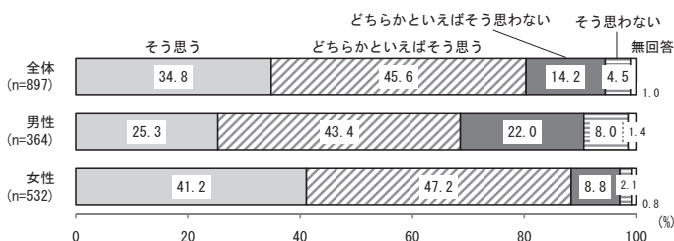
【図8-8 夫婦別姓は法律で認められるべきだ】



夫婦別姓は法律で認められるべきだという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が35.8%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思わない」が31.0%、「そう思う」が20.7%となっている。なお、『肯定的』割合は56.5%、『否定的』割合は42.9%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が最も多く、『肯定的』割合は男性が54.4%、女性が57.9%で、女性のほうが3.5ポイント高くなっている。（図8-8）

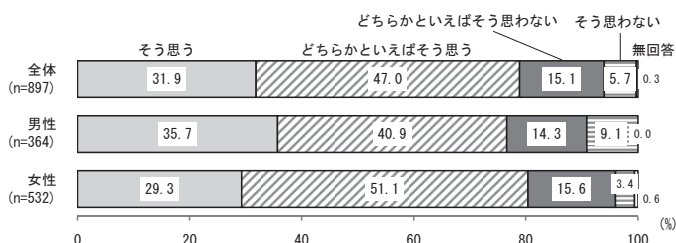
【図8-9 同性どうしの結婚は法律で認められるべきだ】



同性どうしの結婚は法律で認められるべきだという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が45.6%で最も多く、次いで「そう思う」が34.8%となっており、『肯定的』割合は80.4%を占めている。一方、『否定的』割合は18.7%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が最も多く、「そう思う」が男性は25.3%、女性は41.2%で、女性のほうが15.9ポイント高くなっており、『肯定的』割合では男性が68.7%、女性が88.4%を占めている。(図8-9)

【図8-10 不倫をした人が社会的に非難されるのは仕方ない】



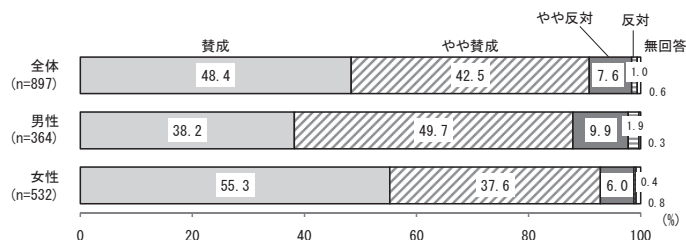
不倫をした人が社会的に非難されるのは仕方ないという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が47.0%で最も多く、次いで「そう思う」が31.9%となっており、『肯定的』割合は78.9%を占めている。一方、『否定的』割合は20.8%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が最も多く、「そう思う」が男性は35.7%、女性は29.3%で、男性のほうが6.4ポイント高くなっており、『肯定的』割合では男性が76.6%、女性が80.4%を占めている。(図8-10)

問 9. 学校教育に関する意見

問 9. 高校までの学校教育に関する次のようなそれぞれの意見について、あなたは賛成ですか、反対ですか。あなたの考えに最も近い番号にひとつに○をつけてください。

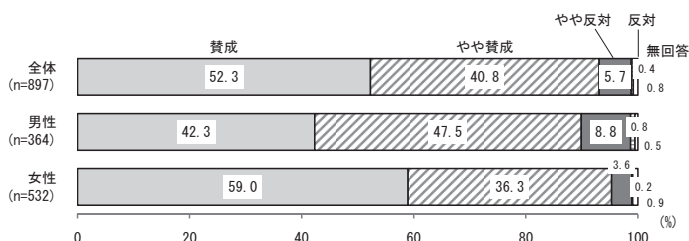
【図 9-1 同性愛という性のあり方があることを、義務教育で教えること】



同性愛という性のあり方があることを、義務教育で教えることについて、全体では「賛成」が48.4%で最も多く、次いで「やや賛成」が42.5%となっており、両者を合わせた『賛成派』割合が90.9%を占めている。一方、『反対派（「やや反対」＋「反対」）』割合は8.6%となっている。

性別でみると、男性は「やや賛成」が49.7%で最も多くなっている。女性は「賛成」が55.3%で最も多く、男性（38.2%）に比べ17.1ポイント高くなっている。なお、『賛成派』割合では、男性が87.9%、女性が92.9%を占めている。（図 9-1）

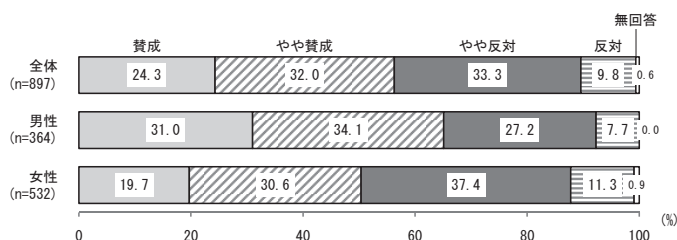
【図 9-2 トランスジェンダーについて、義務教育で教えること】



トランスジェンダーについて、義務教育で教えることは、全体では「賛成」が52.3%で最も多く、次いで「やや賛成」が40.8%となっており、『賛成派』割合は93.1%を占めている。一方、『反対派』割合は6.1%となっている。

性別でみると、男性は「やや賛成」が47.5%で最も多くなっている。女性は「賛成」が59.0%で最も多く、男性（42.3%）に比べ16.7ポイント高くなっている。なお、『賛成派』割合では、男性が89.8%、女性が95.3%を占めている。（図9-2）

【図9-3 中高の体育を男女共修で行うこと】

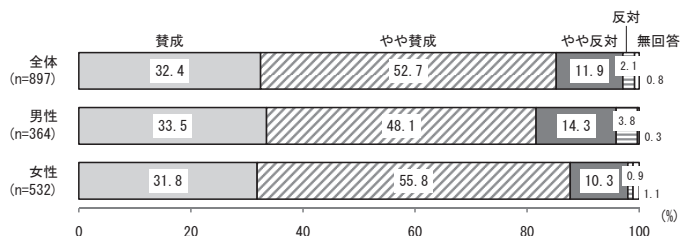


中高の体育を男女共修で行うことについて、全体では「やや反対」が33.3%で最も多く、次いで「やや賛成」が32.0%、「賛成」が24.3%となっている。なお、『賛成派』割合は56.3%、『反対派』割合は43.1%となっている。

性別でみると、男性は「やや賛成」が34.1%で最も多く、「賛成」は31.0%で女性（19.7%）に比べ11.3ポイント高くなっており、『賛成派』割合は65.1%を占めている。一方、女性は「やや反対」が37.4%で最も多く、『反対派』割合は48.7%で男性（34.9%）に比べ13.8ポイント高くなっているが、『賛成派』割合は50.3%を占めている。（図9-3）

近現代に重点をおいた歴史教育を行うことについて、全体では「やや賛成」が52.7%で最も多く、次いで「賛成」が32.4%となっており、『賛成派』割合は85.1%を占めている。一方、『反対派』割合は14.0%となっている。

【図 9-4 近現代に重点をおいた歴史教育を行うこと】

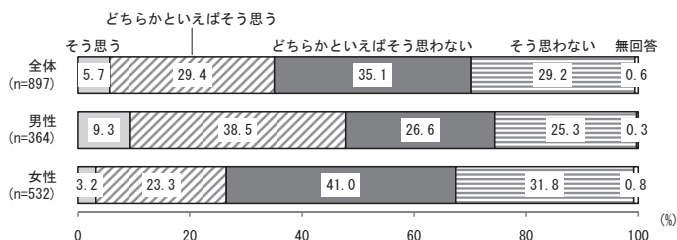


性別でみると、男女とも「やや賛成」が最も多く、『賛成派』割合は男性が81.6%、女性が87.6%で、女性のほうが6.0ポイント高くなっている。
(図 9-4)

問 10. 性意識／戦争に関する意見

問 10. 世の中には次のような意見がありますが、あなたはどのように思いますか。あなたの考えに最も近い番号に○をつけてください。(それぞれ○はひとつ)

【図 10-1 デートなどでは、男性が金銭面の面倒をするべきだ】

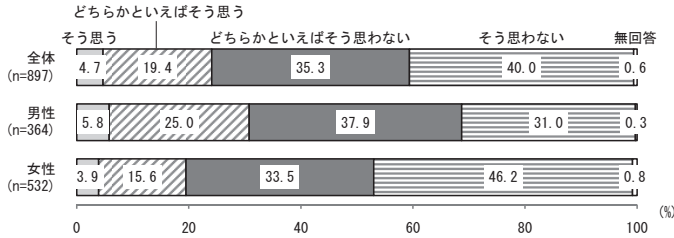


デートなどでは、男性が金銭面の面倒をするべきだという意見について、全体では「どちらかといえばそう思わない」が35.1%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思う」が29.4%、僅差で「そう思わない」が29.2%となっている。なお、『肯定的（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）』割合は35.1%、『否定的（「どちらかといえばそう思わない」＋「そう思わない」）』割合は64.3%となっている。

性別でみると、男性は「どちらかといえばそう思う」が38.5%で最も多

く、女性は「どちらかといえばそう思わない」が41.0%で最も多くなっている。なお、『否定的』割合では、男性が51.9%、女性が72.8%で、女性のほうが20.9ポイント高くなっている。(図10-1)

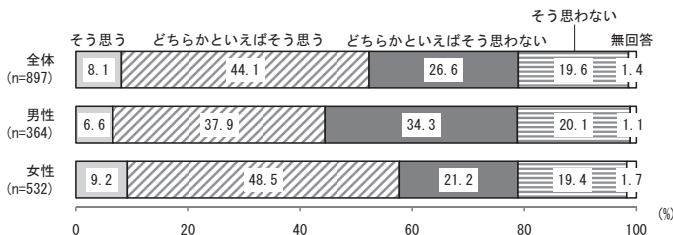
【図10-2 恋人からは束縛されてもいい】



恋人からは束縛されてもいいという意見について、全体では「そう思わない」が40.0%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思わない」が35.3%となっており、『否定的』割合は75.3%を占めている。一方、『肯定的』割合は24.1%となっている。

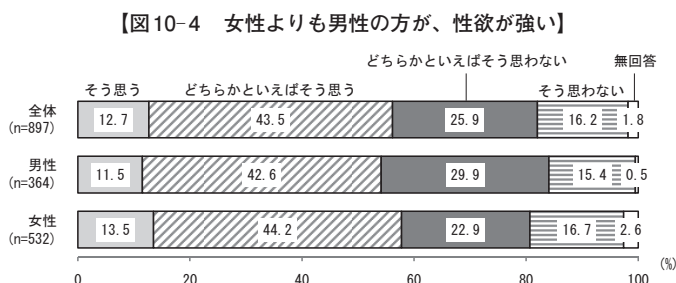
性別でみると、男性は「どちらかといえばそう思わない」が37.9%で最も多くなっている。女性は「そう思わない」が46.2%で最も多く、男性(31.0%)に比べ15.2ポイント高くなっている。一方、『肯定的』割合では、男性が30.8%、女性が19.5%で、男性のほうが11.3ポイント高くなっている。(図10-2)

【図10-3 性的関係では男性がリードすべきだ】



性的関係では男性がリードすべきだという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が44.1%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思わない」が26.6%、「そう思わない」が19.6%となっている。なお、『肯定的』割合は52.2%、『否定的』割合は46.2%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が最も多くなっているが、男性は『否定的』割合が54.4%、女性は『肯定的』割合が57.7%を占めている。(図10-3)

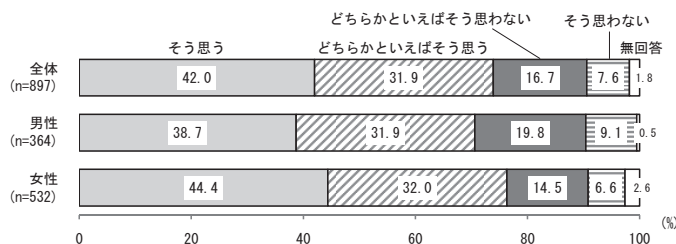


女性よりも男性の方が、性欲が強いという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が43.5%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思わない」が25.9%、「そう思わない」が16.2%となっている。なお、『肯定的』割合は56.2%、『否定的』割合は42.1%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が4割台で最も多く、『肯定的』割合は男性が54.1%、女性が57.7%で、女性のほうが3.6ポイント高くなっている。一方、『否定的』割合では、男性が45.3%、女性が39.6%で、男性のほうが5.7ポイント高くなっている。(図10-4)

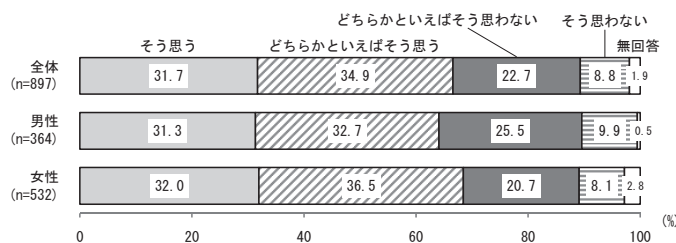
買春をする男性は非難されるべきだという意見について、全体では「そう思う」が42.0%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思う」が31.9%となっており、『肯定的』割合は73.9%を占めている。一方、『否定的』割合は24.3%となっている。

【図10-5 買春をする男性は非難されるべきだ】



性別でみると、男女とも「そう思う」が最も多く、男性は38.7%、女性は44.4%で、女性のほうが5.7ポイント高くなっている。なお、『肯定的』割合では、男性が70.6%、女性が76.4%を占めている。(図10-5)

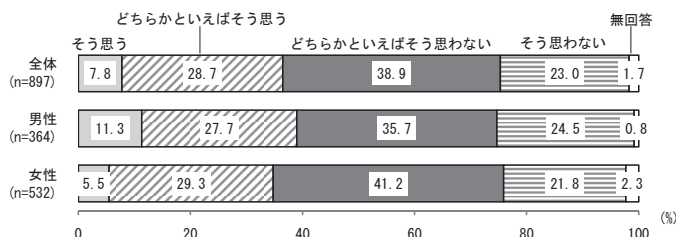
【図10-6 売春をする女性は非難されるべきだ】



売春をする女性は非難されるべきだという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が34.9%で最も多く、次いで「そう思う」が31.7%となっており、『肯定的』割合は66.6%を占めている。一方、『否定的』割合は31.5%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が最も多く、『肯定的』割合は男性が64.0%、女性が68.5%で、女性のほうが4.5ポイント高くなっている。(図10-6)

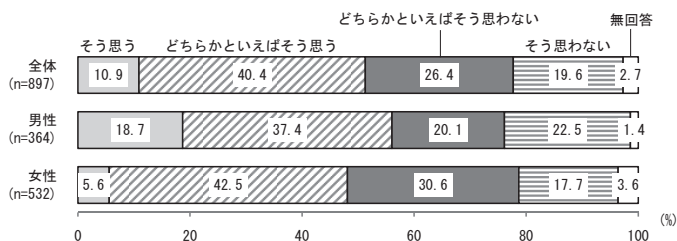
【図10-7 妊娠した高校生が退学処分になるのは仕方がない】



妊娠した高校生が退学処分になるのは仕方がないという意見について、全体では「どちらかといえばそう思わない」が38.9%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思う」が28.7%、「そう思わない」が23.0%となっている。なお、『肯定的』割合は36.5%、『否定的』割合は61.9%を占めている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思わない」が最も多く、『否定的』割合は男性で60.2%、女性で63.0%を占めている。一方、『肯定的』割合では、男性が39.0%、女性が34.8%で、男性のほうが4.2ポイント高くなっている。(図10-7)

【図10-8 戦争に行くのは、男性であるべきだ】

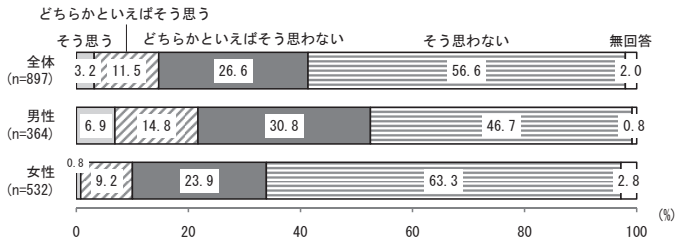


戦争に行くのは、男性であるべきだという意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が40.4%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思わない」が26.4%、「そう思わない」が19.6%となっている。な

お、『肯定的』割合は51.3%、『否定的』割合は46.0%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が最も多くなっている。なお、男性は「そう思う」が18.7%で女性（5.6%）に比べ13.1ポイント高くなっており、『肯定的』割合は56.1%を占めている。一方、女性は『肯定的』割合が48.1%、『否定的』割合が48.3%で、ほぼ同率となっている。（図10-8）

【図10-9 戦争中は性暴力が生じるのは仕方がない】



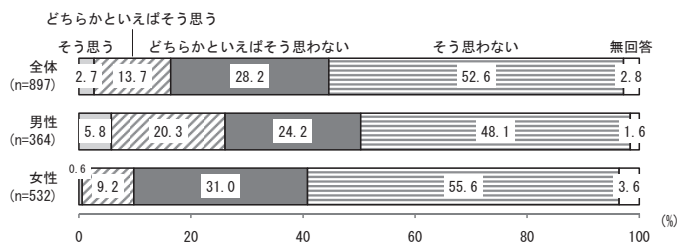
戦争中は性暴力が生じるのは仕方がないという意見について、全体では「そう思わない」が56.6%で最も多く、次いで「どちらかといえばそう思わない」が26.6%となっており、『否定的』割合は83.2%を占めている。一方、『肯定的』割合は14.7%となっている。

性別でみると、男女とも「そう思わない」が最も多く、男性は46.7%、女性は63.3%で、女性のほうが16.6ポイント高くなっている。一方、『肯定的』割合では、男性が21.7%で女性（10.0%）に比べ11.7ポイント高くなっている。（図10-9）

問11. もし戦争になった場合、進んで自国のために戦うと思うか

問11. もし戦争になったら、あなたは進んで自分の国のために戦うと思いますか。（○はひとつ）

【図11 もし戦争になった場合、進んで自国のために戦うと思うか】



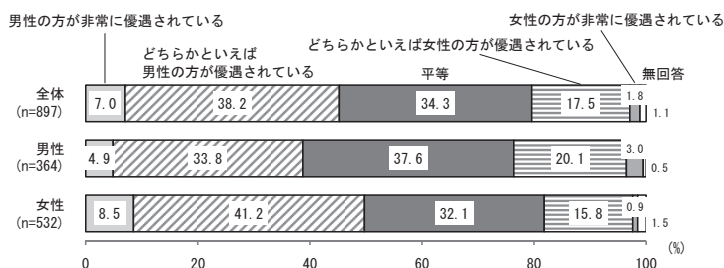
もし戦争になった場合、進んで自国のために戦うと思うかについて、全体では「そう思わない」が52.6%で最も多く、次いで「どちらかといえなそう思わない」が28.2%となっており、両者を合わせた『否定的』割合は80.8%を占めている。一方、『肯定的（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）』割合は16.4%となっている。

性別でみると、男女とも「そう思わない」が最も多く、『否定的』割合は男性で72.3%、女性で86.6%となっている。一方、『肯定的』割合では、男性が26.1%で女性（9.8%）に比べ16.3ポイント高くなっている。（図11）

問12. 分野別の男女の地位

問12. あなたは、次の分野で男女の地位は平等になっていると思いますか。それぞれあなたの気持ちに最も近いものをひとつだけお答えください。

【図12-1 家庭生活】

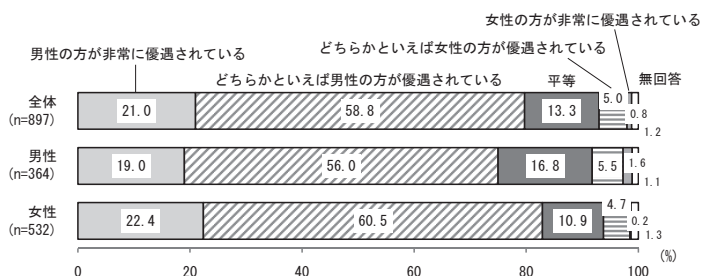


家庭生活での男女の地位について、全体では「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が38.2%で最も多く、次いで「平等」が34.3%、「ど

「どちらかといえば女性の方が優遇されている」が17.5%となっている。なお、『男性優遇（「男性の方が非常に優遇されている」＋「どちらかといえば男性の方が優遇されている」）』割合は45.2%、『女性優遇（「どちらかといえば女性の方が優遇されている」＋「女性の方が非常に優遇されている」）』割合は19.3%となっている。

性別でみると、男性は「平等」が37.6%で最も多く、女性は「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が41.2%で最も多くなっている。なお、『男性優遇』割合では、男性が38.7%、女性が49.7%で、女性のほうが11.0ポイント高くなっている。また、「平等」では、女性が32.1%で男性に比べ女性のほうが5.5ポイント低くなっている。（図12-1）

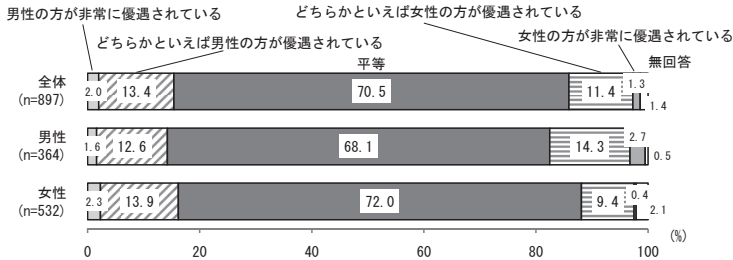
【図12-2 職場】



職場での男女の地位について、全体では「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が58.8%で最も多く、次いで「男性の方が非常に優遇されている」が21.0%となっており、『男性優遇』割合は79.8%を占めている。なお、「平等」は13.3%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が過半数を占めており、『男性優遇』割合は男性が75.0%、女性が82.9%で、女性のほうが7.9ポイント高くなっている。なお、「平等」では、男性が16.8%、女性が10.9%で、女性のほうが5.9ポイント低くなっている。（図12-2）

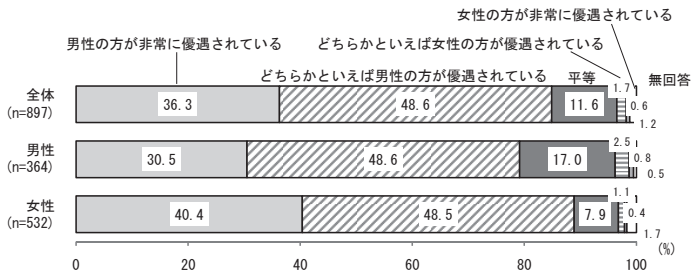
【図12-3 学校教育の場】



学校教育の場での男女の地位について、全体では「平等」が70.5%を占めている。なお、『男性優遇』割合は15.4%、『女性優遇』割合は12.7%となっている。

性別でみると、男女とも「平等」が最も多く、男性は68.1%、女性は72.0%で、女性のほうが3.9ポイント高くなっている。また、男性は『男性優遇』（14.2%）より『女性優遇』（17.0%）のほうが多く、女性は『女性優遇』（9.8%）より『男性優遇』（16.2%）のほうが多くなっている。（図12-3）

【図12-4 政治の場】

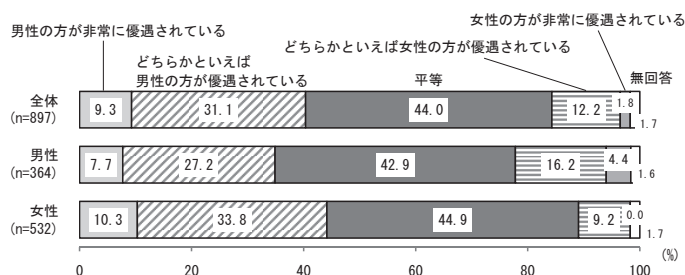


政治の場での男女の地位について、全体では「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が48.6%で最も多く、次いで「男性の方が非常に優遇されている」が36.3%となっており、『男性優遇』割合は84.9%を占め

ている。なお、「平等」は11.6%となっている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が48%台で最も多くなっている。なお、「男性の方が非常に優遇されている」は、男性が30.5%、女性が40.4%で、女性のほうが9.9ポイント高くなっている。また、「平等」では、男性が17.0%、女性が7.9%で、女性のほうが9.1ポイント低くなっている。(図12-4)

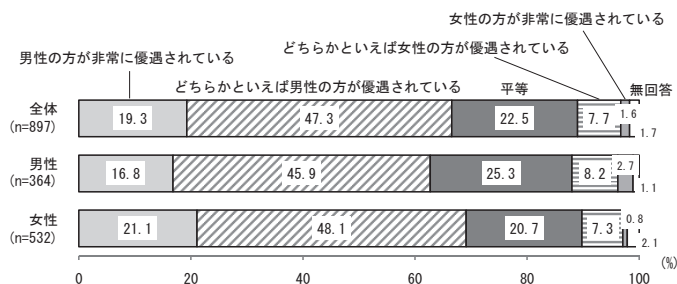
【図12-5 法律や制度の上】



法律や制度の上での男女の地位について、全体では「平等」が44.0%で最も多く、次いで「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が31.1%、「どちらかといえば女性の方が優遇されている」が12.2%となっている。なお、『男性優遇』割合は40.4%、『女性優遇』割合は14.0%となっている。

性別でみると、男女とも「平等」が最も多く、男性が42.9%、女性が44.9%となっている。また、『男性優遇』割合では、男性が34.9%、女性が44.1%で、女性のほうが9.2ポイント高くなっている。一方、『女性優遇』割合では、男性が20.6%、女性が9.2%で、男性のほうが11.4ポイント高くなっている。(図12-5)

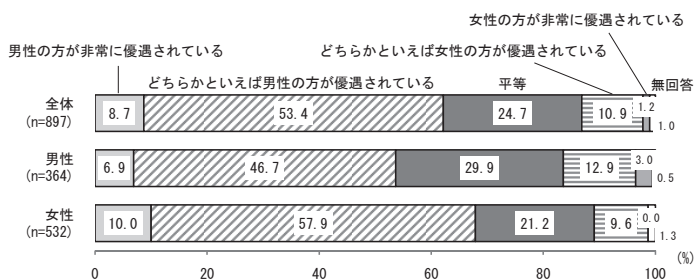
【図12-6 社会通念・慣習・しきたりなど】



社会通念・慣習・しきたりなどの男女の地位について、全体では「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が47.3%で最も多く、次いで「平等」が22.5%、「男性の方が非常に優遇されている」が19.3%となっている。なお、『男性優遇』割合は66.6%を占めている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が4割台で最も多く、『男性優遇』割合は男性が62.7%、女性が69.2%で、女性のほうが6.5ポイント高くなっている。なお、「平等」では、男性が25.3%、女性が20.7%で、女性のほうが4.6ポイント低くなっている。(図12-6)

【図12-7 社会全体】



社会全体の男女の地位について、全体では「どちらかといえば男性の方

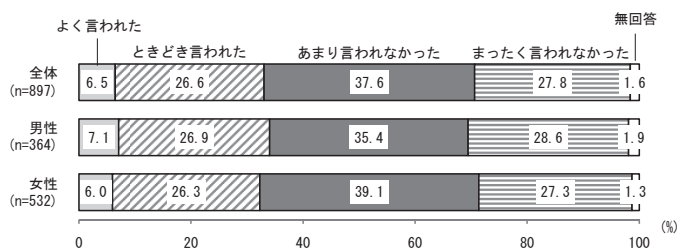
が優遇されている」が53.4%で最も多く、次いで「平等」が24.7%、「どちらかといえば女性の方が優遇されている」が10.9%となっている。なお、『男性優遇』割合は62.1%を占めている。

性別でみると、男女とも「どちらかといえば男性の方が優遇されている」が最も多く、『男性優遇』割合は男性が53.6%、女性が67.9%で、女性のほうが14.3ポイント高くなっている。また、「平等」では、男性が29.9%、女性が21.2%で、女性のほうが8.7ポイント低くなっている。(図12-7)

問13. (1) 家庭で“男は男らしく、女は女らしく”と言われたか

問13. (1) あなたは家庭で「男は男らしく、女は女らしく」とよく言われましたか。(○はひとつ)

【図13-1 家庭で“男は男らしく、女は女らしく”と言われたか】



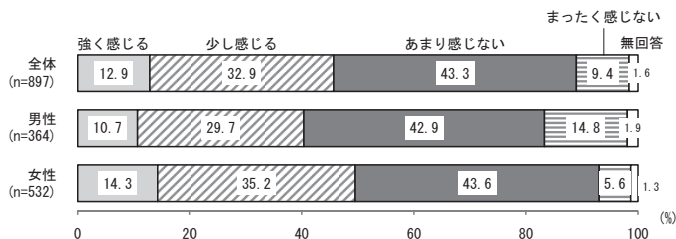
家庭で“男は男らしく、女は女らしく”と言われたかについて、全体では「あまり言われなかった」が37.6%で最も多く、次いで「まったく言われなかった」が27.8%となっており、両者を合わせた『言われなかった』割合は65.4%を占めている。一方、『言われた（「よく言われた」＋「ときどき言われた」）』割合は33.1%となっている。

性別でみると、男女とも「あまり言われなかった」が3割台で最も多く、『言われなかった』割合は男性が64.0%、女性が66.4%を占めている。一方、『言われた』割合では、男性が34.0%、女性が32.3%で、男性のほうが1.7ポイント高くなっている。(図13-1)

問13. (2) “男は男らしく、女は女らしく”という言葉に反発を感じるか

問13. (2) あなたは「男は男らしく、女は女らしく」という言葉に反発を感じますか。(○はひとつ)

【図13-2 “男は男らしく、女は女らしく”という言葉に反発を感じるか】



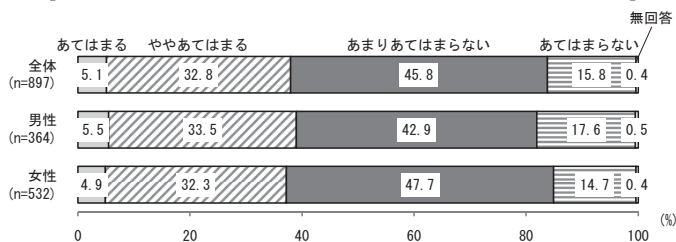
“男は男らしく、女は女らしく”という言葉に反発を感じるかについて、全体では「あまり感じない」が43.3%で最も多く、次いで「少し感じる」が32.9%、「強く感じる」が12.9%となっている。なお、『感じる（「強く感じる」＋「少し感じる」）』割合は45.8%、『感じない（「あまり感じない」＋「まったく感じない」）』割合は52.7%となっている。

性別でみると、男女とも「あまり感じない」が43%前後で最も多くなっている。なお、『感じる』割合では、男性が40.4%、女性が49.5%で、女性の方が9.1ポイント高くなっている。(図13-2)

問14. 自分自身について

問14. あなたは以下の項目について、どのくらいあてはまりますか。(それぞれ○はひとつ)

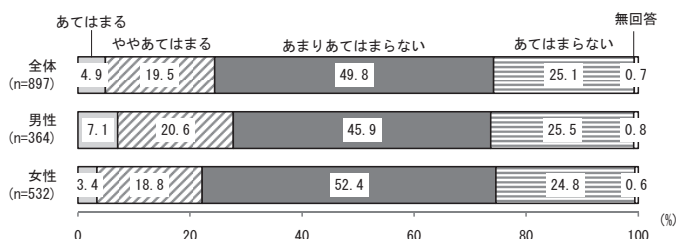
【図14-1 自分と異なった意見を言う人とは、距離を置きたい】



自分と異なった意見を言う人とは、距離を置きたいという意見について、全体では「あまりあてはまらない」が45.8%で最も多く、次いで「ややあてはまる」が32.8%、「あてはまらない」が15.8%となっている。なお、『該当（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）』割合は37.9%、『非該当（「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」）』割合は61.6%となっている。

性別でみると、男女とも「あまりあてはまらない」が4割台で最も多くなっている。なお、『該当』割合では、男性が39.0%、女性が37.2%で、男性のほうが1.8ポイントと高くなっている。（図14-1）

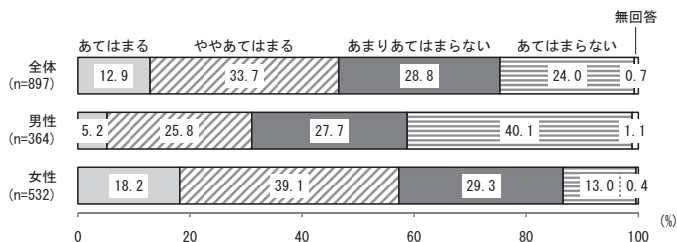
【図14-2 インターネットでは、自分の考え方と異なる書き込みは読まないほうだ】



インターネットでは、自分の考え方と異なる書き込みは読まないほうだという意見について、全体では「あまりあてはまらない」が49.8%で最も多く、次いで「あてはまらない」が25.1%となっており、『非該当』割合は74.9%を占めている。一方、『該当』割合は24.4%となっている。

性別でみると、男女とも「あまりあてはまらない」が最も多く、『非該当』割合は男性が71.4%、女性が77.2%を占めている。一方、『該当』割合では、男性が27.7%、女性が22.2%で、男性のほうが5.5ポイント高くなっている。（図14-2）

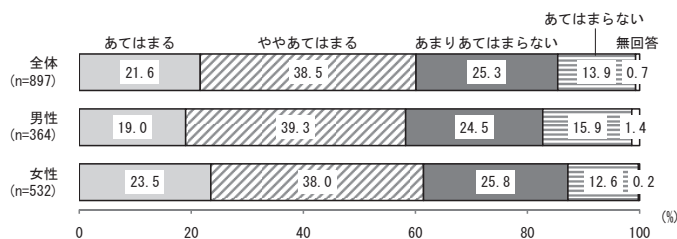
【図14-3 占いを信じるほうだ】



占いを信じるほうだという意見について、全体では「ややあてはまる」が33.7%で最も多く、次いで「あまりあてはまらない」が28.8%、「あてはまらない」が24.0%となっている。なお、『該当』割合は46.6%、『非該当』割合は52.8%となっている。

性別でみると、男性は「あてはまらない」が40.1%で最も多く、女性（13.0%）に比べ27.1ポイント高くなっており、『非該当』割合は67.8%を占めている。一方、女性は「ややあてはまる」が39.1%で最も多く、「あてはまる」は18.2%で男性（5.2%）に比べ13.0ポイント高くなっており、『該当』割合は57.3%を占めている。（図14-3）

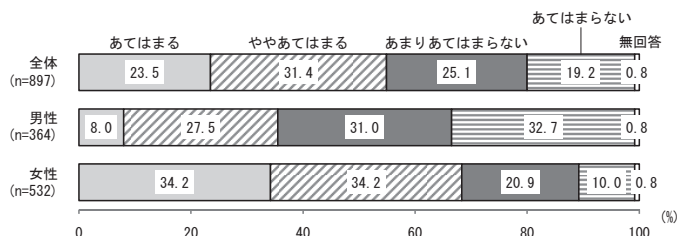
【図14-4 自分の服装や持ち物が、仲間から浮いていないか気になるほうだ】



自分の服装や持ち物が、仲間から浮いていないか気になるほうだという意見について、全体では「ややあてはまる」が38.5%で最も多く、次いで「あまりあてはまらない」が25.3%、「あてはまる」が21.6%となっている。なお、『該当』割合は60.1%、『非該当』割合は39.2%となっている。

性別でみると、男女とも「ややあてはまる」が約4割で最も多く、『該当』割合は男性が58.3%、女性が61.5%で、女性のほうが3.2ポイント高くなっている。(図14-4)

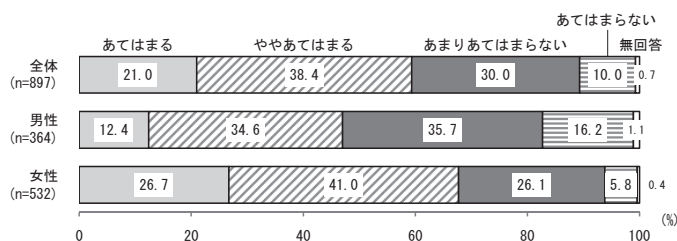
【図14-5 体重を気にするほうだ】



体重を気にするほうだという意見について、全体では「ややあてはまる」が31.4%で最も多く、次いで「あまりあてはまらない」が25.1%、「あてはまる」が23.5%となっている。なお、『該当』割合は54.9%、『非該当』割合は44.3%となっている。

性別でみると、男性は「あてはまらない」が32.7%で最も多く、『非該当』割合は63.7%となっている。一方、女性は「あてはまる」と「ややあてはまる」がともに34.2%で最も多く、『該当』割合は68.4%となっている。(図14-5)

【図14-6 自分の容姿が気に入らない】

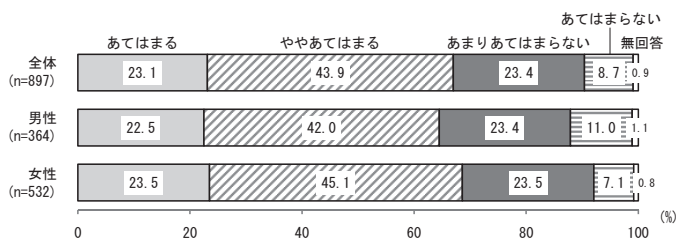


自分の容姿が気に入らないという意見について、全体では「ややあては

まる」が38.4%で最も多く、次いで「あまりあてはまらない」が30.0%、「あてはまる」が21.0%となっている。なお、『該当』割合は59.4%、『非該当』割合は40.0%となっている。

性別でみると、男性は「あまりあてはまらない」が35.7%で最も多く、『非該当』割合は51.9%となっている。一方、女性は「ややあてはまる」が41.0%で最も多く、『該当』割合は67.7%となっている。(図14-6)

【図14-7 強い人にひかれる（あこがれる）ほうだ】

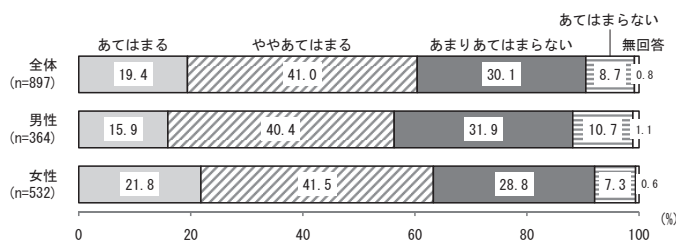


強い人にひかれる（あこがれる）ほうだという意見について、全体では「ややあてはまる」が43.9%で最も多く、次いで「あまりあてはまらない」が23.4%、「あてはまる」が23.1%となっている。なお、『該当』割合は67.0%、『非該当』割合は32.1%となっている。

性別でみると、男女とも「ややあてはまる」が4割台で最も多く、『該当』割合は男性が64.5%、女性が68.6%で、女性のほうが4.1ポイント高くなっている。(図14-7)

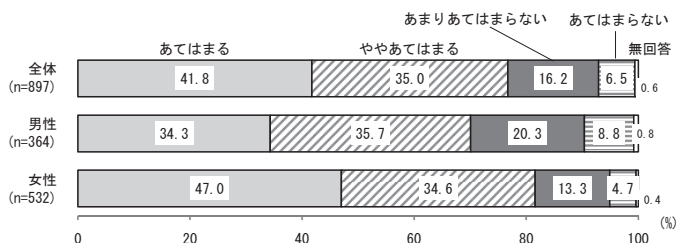
意見が合わないことがあっても、対立するのは嫌なので、相手に合わせることが多いという意見について、全体では「ややあてはまる」が41.0%で最も多く、次いで「あまりあてはまらない」が30.1%、「あてはまる」が19.4%となっている。なお、『該当』割合は60.4%、『非該当』割合は38.8%となっている。

【図14-8 意見が合わないことがあっても、対立するのは嫌なので、相手に合わせることが多い】



性別でみると、男女とも「ややあてはまる」が41%前後で最も多く、「あてはまる」は男性が15.9%、女性が21.8%で、女性のほうが5.9ポイント高くなっている。なお、『該当』割合では、男性が56.3%、女性が63.3%となっている。(図14-8)

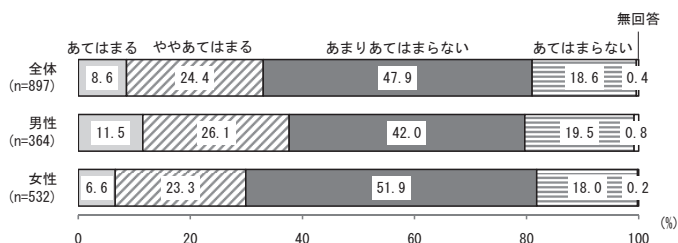
【図14-9 自分の悩みや将来について、相談できる友人がいる】



自分の悩みや将来について、相談できる友人がいるという意見について、全体では「あてはまる」が41.8%で最も多く、次いで「ややあてはまる」が35.0%となっており、『該当』割合は76.8%を占めている。一方、『非該当』割合は22.7%となっている。

性別でみると、男性は「ややあてはまる」が35.7%で最も多く、女性は「あてはまる」が47.0%で最も多くなっている。一方、『非該当』割合では、男性が29.1%、女性が18.0%で、男性のほうが11.1ポイント高くなっている。(図14-9)

【図 14-10 友人とは政治や社会問題などの話はしないようにしている】



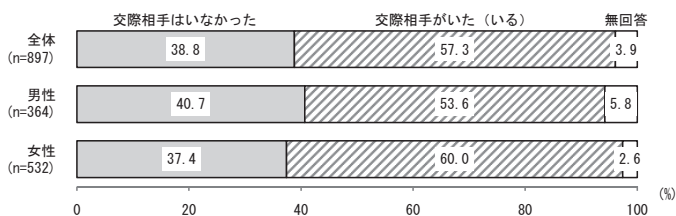
友人とは政治や社会問題などの話はしないようにしているという意見について、全体では「あまりあてはまらない」が47.9%で最も多く、次いで「ややあてはまる」が24.4%、「あてはまらない」が18.6%となっている。なお、『該当』割合は33.0%、『非該当』割合は66.5%となっている。

性別でみると、男女とも「あまりあてはまらない」が4～5割台で最も多くなっている。一方、『該当』割合では、男性が37.6%、女性が29.9%で、男性のほうが7.7ポイント高くなっている。(図14-10)

問 15. 交際経験の有無

問 15. あなたは、これまでに交際相手がいきましたか。当てはまる番号ひとつに○をつけてください。

【図 15 交際経験の有無】



交際経験の有無について、全体では「交際相手があった (いる)」が57.3%を占めており、「交際相手はいなかった」は38.8%となっている。

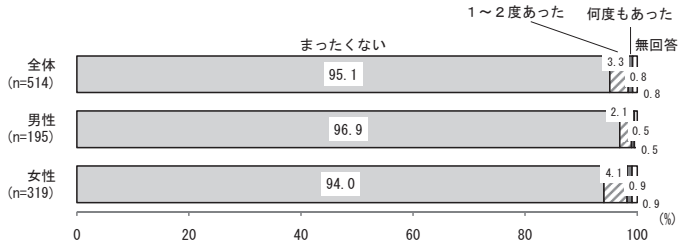
性別でみると、男女とも「交際相手があった (いる)」が過半数を占めており、男性は53.6%、女性は60.0%となっている。(図15)

問 16. (1) 交際相手からの暴力被害の有無

問 16. 交際相手からの暴力被害についてお聞きします。複数の交際相手から暴力を受けた方については、あなたがより傷ついた経験のひとつについてお答えください。

(1) あなたは、交際相手から次のようなことをされたことがありますか。AからDのそれぞれについてあてはまる番号ひとつに○をつけてください。

【図 16-1 A 身体的暴行の被害経験】



交際経験のある人に、身体的暴行の被害経験の有無をたずねると、全体では「まったくない」が95.1%を占めている。「1～2度あった」は3.3%、「何度もあった」は0.8%となっており、両者を合わせた『被害経験あり』割合は4.1%となっている。

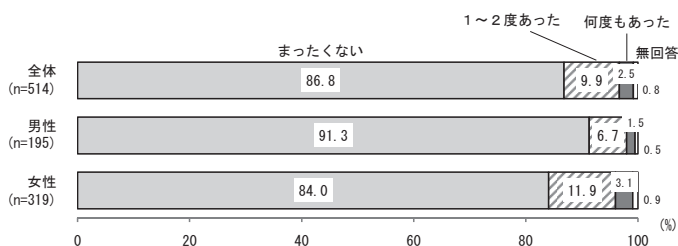
性別でみると、男女とも「まったくない」が9割台を占めている。なお、『被害経験あり』割合では、男性が2.6%、女性が5.0%で、女性のほうが2.4ポイント高くなっている。(図 16-1 A)

『男女間における暴力に関する調査』(2017年、内閣府、以降全国調査と表記)においても交際相手からの暴力について調査項目があることから、それと比較することで関大生の被害経験の傾向を明らかにしたい。ただし全国調査では被害を経験した年代を複数回答で答える設定となっており、被害経験で比較することはできない。それぞれの調査にある「まったくない」の回答を比較することでみていくことにする。

全国調査で身体的攻撃を経験していない人は全体で88.9%となっており、関大生の未経験者が95.1%であることから、関大生の未経験者の方が6.2

ポイント高くなっている。性別でも同様の傾向がみられ、男性では90.6%、女性では87.4%が未経験となっており、関大生の96.9%、94.0%の方がそれぞれ6.3ポイント、6.6ポイント全国調査を上回っている。以上のことから、関大生は全国調査に比べると、身体的攻撃の経験率は低いといえるだろう。

【図16-1B 心理的攻撃の被害経験】

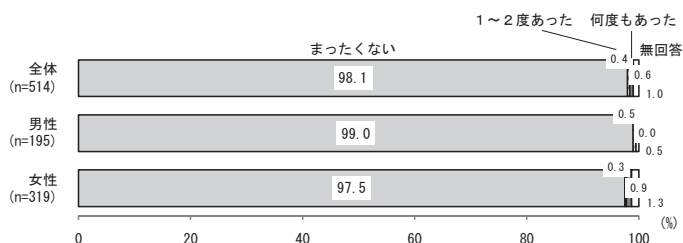


交際経験のある人に、心理的攻撃の被害経験の有無をたずねると、全体では「まったくない」が86.8%を占めている。「1～2度あった」は9.9%、「何度もあった」は2.5%となっており、『被害経験あり』割合は12.4%となっている。

性別でみると、男女とも「まったくない」が8～9割台を占めている。なお、『被害経験あり』割合では、男性が8.2%、女性が15.0%で、女性のほうが6.8ポイント高くなっている。(図16-1B)

全国調査では心理的攻撃を経験していない人は全体で86.5%、性別では男性が89.5%、女性が83.8%となっている。関大生の未経験率は全体で86.8%、男性は91.3%、女性は84.0%であることから、関大生の方が全体で0.3ポイント、男性では1.8ポイント、女性では0.2ポイント高いことがわかる。以上のことから、心理的攻撃の経験については関大生は全国調査に比べて、若干低いといえるだろう。

【図16-1C 経済的圧迫の被害経験】

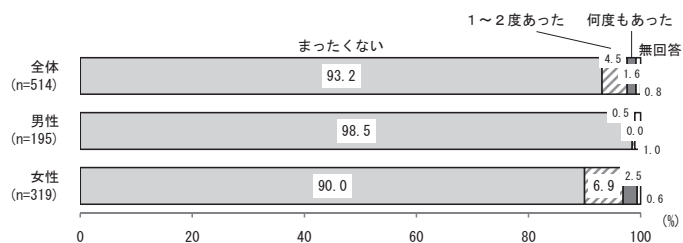


交際経験のある人に、経済的圧迫の被害経験の有無をたずねると、全体では「まったくない」が98.1%を占めている。「1～2度あった」は0.4%、「何度もあった」は0.6%となっており、『被害経験あり』割合は1.0%となっている。

性別でみると、男女とも「まったくない」が9割台を占めている。なお、『被害経験あり』割合では、男性が0.5%、女性が1.2%で、女性のほうが0.7ポイント高くなっている。(図16-1C)

全国調査では、経済的圧迫の未経験率は全体で92.2%、男性は93.9%、女性は90.7%となっている。関大生はそれぞれ98.1%、99.0%、97.5%であることから、関大生の方が全体で5.9ポイント、男性で5.1ポイント、女性では6.8ポイント高いことがわかる。以上のことから、経済的圧迫の経験も全国調査よりも関大生のほうが低いといえるだろう。

【図16-1D 性的強要の被害経験】



交際経験のある人に、性的強要の被害経験の有無をたずねると、全体で

は「まったくない」が93.2%を占めている。「1～2度あった」は4.5%、「何度もあった」は1.6%となっており、『被害経験あり』割合は6.1%となっている。

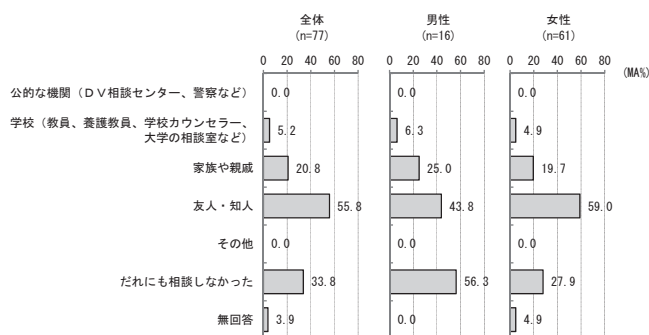
性別でみると、男女とも「まったくない」が9割台を占めている。なお、『被害経験あり』では、男性が0.5%、女性が9.4%で、女性のほうが8.9ポイント高くなっている。(図16-1D)

全国調査では性的強要の未経験率は全体で90.7%、男性が91.2%、女性は87.5%となっている。関大生がそれぞれ93.2%、98.5%、90.0%であることからすると、関大生の方が全体で2.5ポイント、男性は7.3ポイント、女性では2.5ポイント高くなっている。以上のことから、性的強要の経験も関大生の方が全国調査よりも低く、とりわけ男性の経験率が低いといえるだろう。

問16. (2) 交際相手からの暴力被害に対する相談先

問16. (2) あなたは、交際相手から受けたそのような行為について、だれかに相談しました。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

【図16-2 交際相手からの暴力被害に対する相談先】



交際経験のある人のうち、交際相手からの暴力で被害経験がある人に、暴力被害に対する相談先をたずねると、全体では「友人・知人」が55.8%で最も多く、次いで「誰にも相談しなかった」が33.8%、「家族や親戚」が

20.8%、「学校（教員、養護教員、学校カウンセラー、大学の相談室など）」が5.2%となっており、「公的な機関（DV相談センター、警察など）」と回答した人はいない。

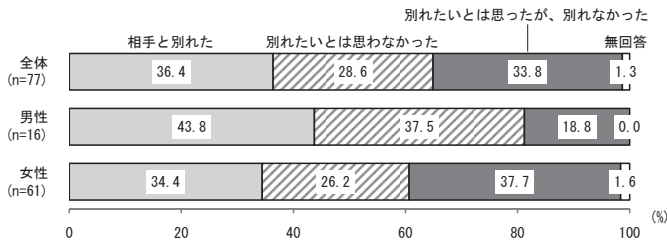
性別でみると、男性は「だれにも相談しなかった」が56.3%で最も多く、次いで「友人・知人」が43.8%となっている。女性は「友人・知人」が59.0%で最も多く、次いで「だれにも相談しなかった」が27.9%となっている。（図16-2）

全国調査では、「だれにも相談しなかった」が全体で41.2%、男性では52.1%、女性で35.7%となっている。関大生はそれぞれ33.8%、56.3%、27.9%となっており、関大生の方が全体で7.4ポイント、女性でも7.8ポイント低くなっているが、男性は4.2ポイント高い。すなわち、関大生は全国調査に比べ、女性は相談している人が多いが、男性は相談していない人が多いことがわかる。

問16.（3）交際相手からの暴力被害後の対応

問16.（3）あなたは、交際相手からそのような行為を受けたとき、どうしましたか。（○はひとつ）

【図16-3 交際相手からの暴力被害後の対応】



交際経験のある人のうち、交際相手からの暴力で被害経験がある人に、暴力被害後の対応をたずねると、全体では「相手と別れた」が36.4%で最も多く、次いで「別れたいとは思ったが、別れなかった」が33.8%、「別れたいとは思わなかった」が28.6%となっている。

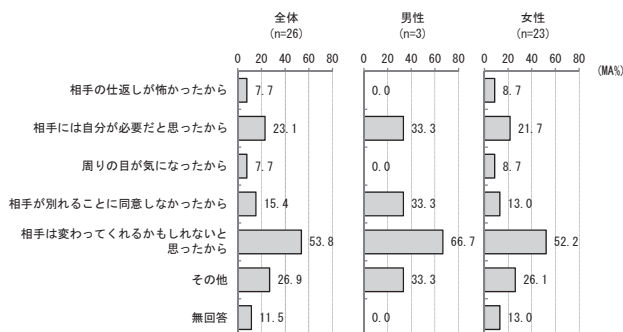
性別でみると、男性は「相手と別れた」が43.8%で最も多く、次いで「別れたいとは思わなかった」が37.5%となっている。一方、女性は「別れたいとは思ったが、別れなかった」が37.7%で最も多く、次いで「相手と別れた」が34.4%となっている。（図16-3）

全国調査をみると、「相手と別れた」は全体で50.0%、男性が37.4%、女性は56.0%となっている。関大生はそれよりも全体で13.6ポイント低く、男性は6.4ポイント高く、女性は21.6ポイント低くなっている。以上のことから、関大生は男性は全国よりも相手と別れた人が多いが、女性はその逆で、別れた人が20ポイント以上低くなっていることがわかる。

問16. (4) 暴力行為を受けても交際相手と別れなかった理由

問16. (4) あなたが相手と別れなかった理由は何ですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

【図16-4 暴力行為を受けても交際相手と別れなかった理由】



交際相手からの暴力被害があっても、別れなかった人に、その理由をたずねると、全体では、「相手は変わってくれるかもしれないと思ったから」が53.8%で最も多く、次いで「相手には自分が必要だと思ったから」が23.1%、「相手が別れることに同意しなかったから」が15.4%となっている。

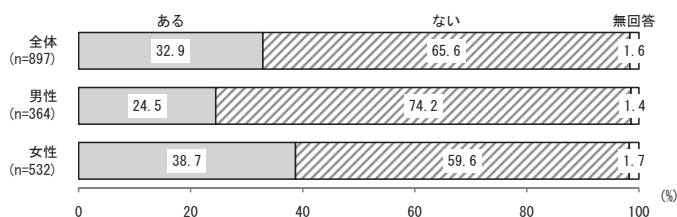
性別でみると、男性の該当者は3人なので一概には言えないが、「相手は変わってくれるかもしれないと思ったから」が66.7%で最も多くなっている。

る。一方、女性では、「相手は変わってくれるかもしれないと思ったから」が52.2%で最も多く、次いで「相手には自分が必要だと思ったから」が21.7%となっている。(図16-4)

問17. 大学でジェンダーに関する科目の受講有無

問17. あなたはこれまで大学でジェンダーに関する科目を受講したことがありますか。(○はひとつ)

【図17 大学でジェンダーに関する科目の受講有無】



大学でジェンダーに関する科目を受講したことがあるかについて、全体では「ある」が32.9%、「ない」は65.6%となっている。

性別でみると、受講したことが「ある」割合は、男性が24.5%、女性が38.7%で、女性のほうが14.2ポイント高くなっている。(図17)

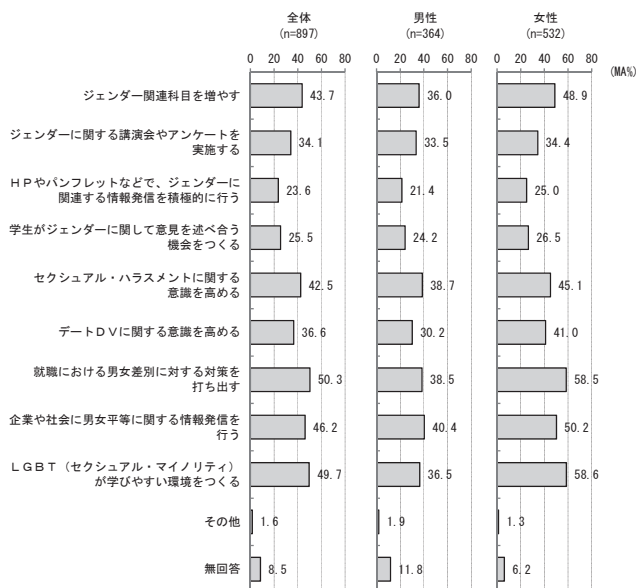
問18. 大学が今後、ジェンダーやセクシュアリティに関して取り組むべき課題

問18. ジェンダーやセクシュアリティに関して、大学は今後どのような取り組みをすべきだと思いますか。取り組むべきだと考えるものすべてに○をつけてください。

大学が今後、ジェンダーやセクシュアリティに関して取り組むべき課題について、全体では「就職における男女差別に対する対策を打ち出す」が50.3%で最も多く、次いで「LGBT（セクシュアル・マイノリティ）が学びやすい環境をつくる」が49.7%、「企業や会社に男女平等に関する情報発信を行う」が46.2%となっている。

性別でみると、男性は「企業や社会に男女平等に関する情報発信を行う」

【図18 大学が今後、ジェンダーやセクシュアリティに関して取り組むべき課題】



が40.4%で最も多く、次いで「セクシュアル・ハラスメントに関する意識を高める」が38.7%となっている。一方、女性は「LGBT（セクシュアル・マイノリティ）が学びやすい環境をつくる」が58.6%で最も多く、僅差で「就職における男女差別に対する対策を打ち出す」が58.5%となっており、これら2項目は男性より20ポイント以上高くなっている。なお、いずれの項目も、男性に比べ女性のほうが高い割合になっている。（図18）

6. 問19 自由記述の分析

問19 昨年報告されたジェンダーギャップ指数（経済、政治、教育、健康の4分野の男女格差を数値化。下位ほど格差が大きいことを示す）では、日本は世界144か国中111位でした。あなたが日常生活で感じている男女格差からみて、この111位という日本の順位をどう考えますか。できるだけ具体的に書いてください。

問19では、国際的なランキングであるジェンダーギャップ指数において、日本の順位が非常に低いことに対する意見を自由回答形式で尋ねている。

全調査数897（紙媒体の質問紙調査とウェブ調査の総計）のうち、Q19の自由回答欄に記入している者は581件（64.8%）。男性（364件）の記入率62.1%に対し、女性（532件）は66.5%と少し高かった。平均的記入文字数である60文字以上記述した者も男性の119件（32.7%）に対し、女性は240件（45.1%）であり、全体として女性回答者の関心の高さがうかがえる結果となった。

分析に当たってはKHCoderを用いて、回答中の頻出語とその使用の傾向を調べたうえで、主に性別による回答の相違をみていった。

頻出語の中で、結果に対する評価や認識とみられる語として多く使われていたのは、「妥当」116件、「当たり前」37件、「納得」25件などである。これらの用語は、日本社会のジェンダーギャップに対する低い評価が日本の現状に見合ったものだという評価を意味している。合わせてよく使われているのが「驚いた」という語（42件）である。大学生である調査対象者たちは、日常生活で、性別による区別・差別を感じた経験はあまりなく、また現在の日本では性差別は解消されてきていると感じていたため、他国との比較でこれほど低い順位が出たことへの驚きや違和感を表現するものだといえる。

ただし「妥当」という語を用いていても、回答者は日本社会のジェンダ

一関係が問題を抱えているという指摘に必ずしも同意しているわけではない。たとえば政治や経済面では確かに女性の活躍が難しい現状があるため、この順位は「妥当」かもしれないが、女性の方が優遇されることや男性が不利益を被る場面があると反論する回答もあった。また、日本社会では、男性が仕事、女性が家庭という役割分業を行うことが「妥当」だという回答もあり、文脈を踏まえて頻出語の意味を理解する必要がある。

女性の方が優遇されている事例の一つとして主にあげられるのは「女性専用車両」(20件)や「レディースデー」(6件)である。「男性専用車両」(5件)や「メンズデー」(4件)がないという指摘も同様のものといえる。また、男性回答者が「女性専用車両」に言及するときには、これを「女性優遇」や「逆差別」の一例だとする意見が中心となる。

ジェンダーギャップと言われまず想像したのは、男尊女卑の考え方でした。でも私にとって身近な男女の区別は、女性専用車両や映画館などでのレディースデーなどで、女性が優遇されるものが多いです。(男性)

近年、男女平等という言葉をよく聞くし、実際にこうしたらいいだろう、ああしたらいいだろう、という議論はテレビ番組等を通して見るが増えた。しかし実際、男は女より上だと思ってる人が多いし、女の人は男女差別がどうか言いながら、女性専用車両を利用したりと逆差別とまでは言わないが、男女差別という実態をうまく利用しようとしている気がする。(男性)

今の日本では女性を優遇する傾向にあるように思える。女性専用車両があるなら男性車両も作ってほしい。男は少し触られてしまっただけでも犯罪者扱いされるし、女性を優先させるために男性が排除されるような事は男女平等とはいえないと思う。昔は男尊女卑だったかもしれないが、今は女尊男卑の世界になってると思う。(男性)

女性専用車両があるのに男性専用車両はない。職場では男性の方が優遇されていると聞くが女性が怒られずに済んだりというのもあると思う。(男性)

他方で、女性回答者の回答は、上記の男性の回答と近いものと、これを批判するものに分かれる。後者には男性が「女性専用車両」がなぜ作られているのかを理解していないのではないかといういらだちが見られる。

女性のトップレス解放などの行き過ぎたフェミニズムや、レディースデーのようにかえって女尊男卑に近い不平等が生じているのも事実である。レディースデーを実施するなら、平等にメンズデーも設置すべきである。(女性)

レディースデーや女性専用車両を見て男性差別だ!なくせ!という輩を多く見かけるがそれは元はこの男尊女卑の社会があるために生まれたものであって、女性専用車両なるものが存在しないといけないという状況が恥ずかしいと私は思う。(女性)

ジェンダーギャップ指数の低さを問題と考える男性の回答には、女性が抱える問題に理解を示しながら、男性としてジェンダーによる社会的役割の限定を問題視する傾向があるようだ。また、この指数が諸外国との比較であるため、特に「仕事」や「働き方」の面で女性だけでなく男性についても、改革を進めていくことが、結果としてジェンダーの平等に結びつくのではないかという回答が特に男性に多かった。

順位が上がらない要因に日本の労働体制が最も大きく関わっていると思います。休みや仕事終わりの時間が充実しないことには仕事において女性と男性に差が出続けると思います。(男性)

同時に女性の回答では、自分自身の家庭や学校での具体的な経験をあげて、女性の社会的地位について述べているものが多数あった。男性の回答では、性差に関心がないか、あるいは男性が感じているプレッシャー（家計を支える、アルバイト先で当然視される力仕事など）と比べ、女性の方が楽である、優遇されているという回答が目立ったのとは対照的である。

男女平等は建前、形だけなのかと思う時がある。私の家では家事は女性がやってきた。母が忙しい間は私が勉強時間を割いて家事をやってきた。私の家ではきょうだいの間でも時間の使い方に差があった。これは極端な例だとは思いますが私の過去を振り返ると女性は不利な立場にあるように感じる。大学でも、女性である私が議論に批判したときに、メンバーの男性陣が少し引いていたようだった。女性は受容するだけの存在ではないし、強く主張する時だってあるだろうと思った。（女性）

私が普段生活していく中では男女の格差はほぼ感じない。それは、私がまだ学生だからで社会に出れば色々と格差を感じることはあるのかもしれないが。だけど、法律や慣習などより多くの人が従う力に近づくにつれて、男女の格差はあからさまに表れていると思う。特に、上のアンケートにもあったが「食事の準備、後片付けは女がする」といったようなことが、大学のサークルでも言われた時にはショックだった。そして、手が回らなくて食事時間が過ぎてもまだ配膳をしている女子の目の前で当たり前のように席について何もしない男子にも。（女性）

家で父は母にとっても優しいので皿洗いや家事などを私にやれと言う。弟には時々言うが強く言わない。父は自分は仕事で疲れている感を出すし、仕事をしているから偉いというか、働いてやっているという意識があるんだと思う。椅子にどっかり座って動かない。そういうところにすごく男女格差を感じる。（女性）

デートなどの金銭面で男性が負担することが当たり前だと言うような考えを持っている人が身近に居たり、私自身も自分の交友関係を否定されたり、携帯をチェックされたり、心理的苦痛を味わっても、相手の男性の罵倒が怖くて言い返せないことがあったりしたので、男性が上に立ってしまう社会なのかなと感じました。(女性)

正直、今までの日常生活で男女格差を感じた事はありません。このアンケートに答えるまで母が仕事をしていないことをあえて考えた事ありませんでした(結婚を機に退職したそうです)。僕と同じような学生は多いのではないのでしょうか。(男性)

また、ジェンダーギャップ指数が国際比較、国際ランキングであることは、回答に二つの反応を引き起こしている。一つは、低い順位となったとしても、日本と外国では社会のあり方が異なっているので仕方がない、比較する意味はないとする回答である。これは男女ともにみられるが、特に男性回答者の中には、こうした国際ランキングの引用を、日本社会や日本人男性に対する不当な評価だと批判するものもあった。

女性議員や女性幹部の比率が、他の主要国よりも低いのは確かだが、女性議員について、今の議会構成は、男女の有権者が選挙で選んだ民意の結果であり、性別の違いという理由ではなく、個々の政治家の能力が評価されたものだと思うので、問題はないと考える。(男性)

男女でそれぞれ役割があり、その技術を習得しようとすることは、日本の伝統的な文化ともいえるので、必ずしもマイナスではないと思います。世界的な順位はかなり低いのですが、プラスにもマイナスにも考えられる、日本らしい順位だと思います。(男性)

日本が111位であるという結果にあまり納得がいかない。日本より上位の国がいったいどのような基準で選ばれたのかよく分からないが、日本は教育、健康の面ではかなり平等だと考える。日常生活において男女格差を感じることは女性専用車両やレディースデイくらいで、就職や政治に関しては女性の進出も増えており、他国と比較してもさほど気にするほどの格差はないと考える。経済や政治に関しては男女間のライフスタイルの違いによる多少の格差が生まれるのは当たり前のことでありそれを異常と捉えることに疑問を感じる。(男性)

他方で、自分自身の留学経験、または海外出身あるいは海外留学経験のある友人からの情報を交えて、日本の働き方や性別役割分業が、他国と比較して大きな問題を抱えていると批判するものもあった。国際比較において日本が非常に低い順位をつけられていることを「恥ずかしいことである」とする回答もみられた。

未だに日本では、様々な場面で男が優遇されている（男の方が給料が高い、高い役職はほとんど男、政治家も大半男など）昔の人たちが作ったこの恥ずかしい風習をどうにかしないと諸国に示しがつかないと思う。(男性)

私は日本人の効率の悪さが関係しているのではないかと考える。外国では転職も普通のことであり、入社式などもなく同年代の人がいたとしてもその会社に入ったのはばらばらの年であることも多い。つまり外国ではすべてが個人で動いているのである。しかし、日本はすべてが団体行動である。大学生活でも、みんなと意見が一緒がいい。など自分の意思で動くことがあまりないのである。また自分の意思で動こうとした場合でも今の会社の制度では、無理にちかいのである。そのことから考えて日本は本当に遅れているなと思う。確かに昔の伝統を守る

ことも大切だと思うが、思い切って新しい方針を打ちだすのもいいのではないかなと思う。そうすれば男女間での差別なども少なくなり、この順位も少しはあげることができるのではないだろうか。(女性)

日本の家庭では夫も妻も働いている共働きという状態であっても、夫は家事を妻の仕事として考えている人が多く手伝う人があまりいないと私は感じている。日本のその考え方を海外の人に伝えたと、日本人の夫は頭がおかしいのか?とまでいう外国人の男性がいる。私はそのことを知り、本当に日本は考え方が遅れているなと思った。(女性)

以上、本稿では、回答の性差を比較しながら、特に注目すべき点をいくつか指摘するにとどめた。今回の分析では数値に表れるような性差を見いだすことはできなかったが、短文での回答にはあまり違いがないにもかかわらず、長文の回答ほど、つまりこの問題への関心が高い層ほど、違いが著しい点には興味を引かれる。男性回答者の中にも社会問題(政治参加や子どもの貧困など)と関連付けて、日本社会のジェンダーギャップについて述べた回答もあるが、長文で書かれているもののほど、日本ではむしろ女性が優遇されているという主張が目立つ。女性の回答の中にも、女性の優遇を指摘するものもあるが、女性としての自分の経験に触れながら、現在の日本社会において女性として生きることの困難を指摘するものが男性と比べて多い。これらの回答者たちは、自分が見ている状況を周囲の男性たちが共有していないことに失望しており、ジェンダーギャップ指数が今後改善していくかどうかについても悲観的である。

今後、この自由回答を回答者たちの日常経験や大学での学び、海外経験等と関連付けて、分析を進めていく必要がある。

(酒井千絵)

7. 問20 自由記述の分析

問20. 「ジェンダーやセクシュアリティに関して、あなた自身が疑問に思っていることはありますか。ご自由にお書きください」

7-1. はじめに

問20は、「ジェンダーやセクシュアリティに関して、あなた自身が疑問に思っていること」について、記述式の回答を求めた項目である。なお、この項目は、前回2008年の調査には含まれておらず、今回の調査から新たに加えられた項目である。

問20の自由記述欄に何らかの記入があったものは、「特になし」という回答を含め、合計308、これらが有効回収数に占める割合は、34.3%であった。調査方法別にみると、質問紙調査の有効回収数のうち、何らかの記入があった回答が占める割合は、41.4% (n=254)、ウェブ調査の有効回収数のうち、何らかの記入があった回答が占める割合は、19.0% (n=54) であった。ウェブ調査における自由記述欄への記入率は、質問紙調査の半分以下であった。

学年・性別毎に有効回収数に占める解答者の割合をみると、1年次女性の29.4% (n=85)、3年次女性の36.2% (n=88)、1年次男性の34.8% (n=79)、3年次男性の40.1% (n=55)、1年次その他0% (n=0)、3年次その他100% (n=1) であった。記入があった割合は、各学年とも女性より男性の方がわずかに多く、男女ともに3年次の方が1年次よりも多かった。

ただし、「特になし」、「ありません」、「わからない」と書かれたものを除いた場合、記入率は1年次女性の21.5% (n=62)、3年次女性の28.0% (n=62)、1年次男性の18.9% (n=43)、3年次男性の30.7% (n=42)、1年次その他0% (n=0)、3年次その他100% (n=1) となり、ジェンダー間の差はほぼ無くなる。

回答内容を見てみると、ジェンダーやセクシュアリティに関する疑問と自身の考え、さらに本調査自体への疑問・意見など多様な内容が記入されており、今の学生がジェンダーやセクシュアリティについて持っている疑問（知りたいこと）を単純に分析することはできない。また、全体の約30%の学生しかこの自由記述欄に記入していないことから、学生全体の傾向を一般化して把握することはできないが、今の関西大学の学生がジェンダーやセクシュアリティについてどのような言説に触れているのか、どのような思いを抱いているのか、その大まかな傾向と具体的な内容を取り上げることには意義があると思われる。

本節では、記述内容をテーマ毎にコード化し、そこから「ジェンダー」、「セクシュアリティ」、「教育の問題」という大きな4つのカテゴリーを抽出した。ジェンダーとセクシュアリティは、相互に複雑に絡み合っており、明確な区分は不可能といえる。実際に記入内容を見てみると、「女らしさ」や「男らしさ」といった明確に「ジェンダー」を指す言葉であっても、「LGBT」についての語りの中で使用されているケースもある。これは単に概念の使い方の間違いではなく、例えば同性愛者のステレオタイプであるジェンダー表現の規範からの逸脱（ゲイの男性は女っぽい、レズビアンは男っぽいなど）を意図して書かれているものもあると思われる。

同時に、性的指向と性自認（SOGI）に基づいてマイノリティ化される人々、いわゆる性的マイノリティやLGBTQについての記述と、「性的マジョリティ」を含めた問題群、例えばジェンダー規範、性別役割分業、セクシャルハラスメント、性暴力、労働環境、男女平等そのものへの懷疑などを分けることで明らかになる問題もある。従って、本節では前者を「セクシュアリティ」としてカテゴリー化し、後者を「ジェンダー」としてカテゴリー化した。さらに、ジェンダーとセクシュアリティ両方に関わる問題について、学校という教育空間における問題を指摘する意見や疑問を持つ記述も見られた。これらは、今後の大学での教育において直接的な示唆を与えてくれる記述として別カテゴリーとしたが、ジェンダーとセクシュア

リティに関わらない学校問題という意味ではない。「その他」は、上記3つのカテゴリーに収まらない問題や疑問、また文章構成により解釈が困難な記述をまとめたカテゴリーであるが、個々の記述の内容や関心が大きく異なるため、本節では扱わない。一人の学生が複数のテーマについて主張や疑問を記入している場合もあり、各カテゴリーに分類された回答数は重複してカウントされている。また、できる限り記述された言葉やテーマの詳細な違いをコード化に反映したため、カウントされる回答数が少ないコードも複数存在する。少数意見や疑問を取り上げないことの問題性に自覚的になりつつも、関西大学の学生全体の傾向を把握するという目的に照らし、本節では回答数が3つ以上のコード（テーマ）を取り上げる。ただ、それらのテーマの分析に有用な示唆を与えてくれる、関係性が強いコード（テーマ）に関しては、分析の中で言及することもある。

7-2. ジェンダーに関する疑問・主張

ジェンダーに関する疑問・主張とカテゴリー化された記述の内容は多岐に渡る。このカテゴリー全体の回答数は143あり、全ての性別カテゴリー（女、男、その他）の回答者が記入していた。これらの回答を、7-2-1)「男女平等」はまだ達成されていない（されるべきである）、7-2-2)「男女平等」の考え方に問題がある、7-2-3)セクハラ・DVに関する疑問・主張、の3つのサブカテゴリーに分類し、それぞれについて以下で考察する。

7-2-1. 「男女平等」はまだ達成されていない（されるべきである）

このサブカテゴリーに分類されたコードは、全部で9つあり、これらは「『男女平等』はまだ達成されておらず、そのことが問題である」という意識を共有している。この中で最も回答数が多かったテーマは、「ジェンダー規範に対する疑問・批判」で、回答数は21であった。

この中で特に目立った主張・疑問は、なぜ人を男女で区別するのか、という根本的な問いである。例えば、「同じ人間なのに男か女かどうかで区別

するのはくだらないと思う」(2年次、女)、「男らしさ、女らしさなどという発言はステレオタイプでしかないのに、なぜなくなるのか」(2年次、男)、「なぜ、女の人が男らしくしてはいけないのか。女の人は女の人『らしく』の『らしく』は何か」(1年次、女)といったものである。これらの疑問には、以下の回答のようにもっとシンプルに個人の特性や興味に基づいて社会が形作られる方が良いという、ジェンダーフリーの考え方が通底している。

ジェンダーについては、個人的には何故そこまで「性別」というもので人を仕分けるようなことをするのが疑問。「やれることをやりたい人がやりたいただけやる」性別なんか関係なしにそう考えればシンプルで分かりやすいのに。(1年次、男)

こういったジェンダー規範の大きな枠組み(女らしさ、男らしさ、性役割)自体への疑問・批判だけでなく、より具体的な事例を挙げてジェンダー規範を問う回答があった。その中でも就職活動や職場環境、育児休業など労働に関わるものが10あり、家庭内における性役割に関するものが6あった。労働に関するものでは、男性の方が就職、昇進ともに有利であること、その根底に男女が平等に育児休暇を所得できない、あるいはしていないこと、育児休暇後の職場復帰の難しさに対する批判などが述べられている。例えば、ある学生は、以下のように職場におけるジェンダー不平等を分析している。

[女性に不利な労働環境]を解消するには男性に育休をつける企業が増えたり、男女ともに残業が少ない状況を作り出す必要があると思います。企業は女性が仕事を男性より多く休む可能性があるために男性をとる傾向にあると考えられます。だから評価基準に訴えるのではなく違うアプローチで男女の休養日数(有休や育休)をそろえることで能

力主義に向かうと思います。(1年次、男)

この回答者は、今の制度のままでは育児休暇や家族のために頻繁に長い残業ができないなど、女性社員の方が総合的に見て労働できる時間が短くなることが女性の採用や昇進の壁になっていると考え、性別ではなく能力に基づいた評価を行うべきであると主張する。

また、アルバイトや就職活動など、大学生が自身の経験に基づいて記述していると思われる回答も3あった。アルバイト先で仕事内容が男女で分けられていること(例.男性はキッチンや力仕事、女性はホールなど客に接する仕事)、就職活動時に女性はスカートと化粧を求められることなどである。これらの回答の中でも、「その他」の性別を選択した学生の回答は、性役割や性規範の強制が学生の生活や人生にどのような影響を及ぼしているのかについて、重要な示唆を与えてくれる。この学生は、小さい頃からスカートが嫌いだったこと、大学入学前にスーツを購入しようとした際に、店員からスカート型の方が就職に有利であると勧められたことについて大変落胆したこと、おそらく自分がトランスジェンダーであることを記述した上で、以下のように社会に出ることの不安と苦痛を訴える。

化粧をするのも死ぬほど嫌いなのです。男性は化粧などしないのに、女性は化粧をしないと常識外れだと言われることが納得いきません。これは他の国でもそうなのでしょう吗？何故、女性と男性は区別されるのでしょうか。綺麗に顔を整えることが常識だというならば、男性にも当てはまるのではないのでしょうか。「男は髭剃りをして綺麗にしている」とかいう意見を見たことがあります、女性だって生える人はしていますし、眉毛だって整えています。その上、何故顔に粉をまぶし、唇に色をつけなければならないと言われるのでしょうか。私個人の嫌悪感を述べて申し訳ありません。ですが、そんな小さなこと、と思われるかもしれないようなことを原因の一つとして、私は社会に

出たくなくてつらい思いを抱えているのです。(3年次、その他)

この学生は、自分自身が抱える苦しみが周囲から「小さなこと」と考えられているかもしれないと感じている。成長するにつれ、周囲が「常識」として性規範に従って生きようになる中で、性規範がこの学生にとっては社会に出たくないと感じるほど重大な問題であること、それを訴えたくても、この社会ではまだ「小さなこと」として認識されていることが示唆される。

家庭内における性役割についての記述では、「男性は外で仕事」、「女性は家で家事」という性役割に対する疑問と批判が述べられている。例えば、1年次の男性は、なぜその反対の役割を果たしてはいけないのかと問う。また1年次の女性は、育児は男女の親に関わらず参加すべきであるのに、育児に積極的に関わる男性が「イクメン」と呼ばれるなど、実際には女性の役割とされていることに疑問を呈している。

次に多くの回答があったのは、世代間や国家間の違いについての記述である。世代間の差を指摘する回答は3あり、いずれも上の世代ほど性規範や性役割にこだわりが強いことを指摘している。また、日本の状況を他国と比較する回答が10あった。この中でも、ジェンダーギャップ指数についての記述が4あり、これは直前の問19で日本のジェンダーギャップ指数について述べられているため、このテーマが念頭にあったため回答に反映された可能性がある。その内容を見てみると、なぜ日本のランキングは低いのか、それはどういう要素によって決められるのか、上位の国々はどのような制度によって高い男女平等を達成しているのか、など、ジェンダーギャップ指数の測定の仕方とより平等とされる社会への興味が示されている。また同時に、「根本的な日本の体制がもしかしたら良くないのか」(1年次、女性)や伝統を疑わない「民族全体的に染み込んだ日本人の悪い癖」(3年次、女)など、日本社会を批判的にみるものもあった。

その他に2つ以上の回答があったテーマは、性規範を再生産するメディ

アの問題を指摘するもの、性産業やインターネットなどにおいて女性が主に性的搾取の対象となっていること、男女差別があることは事実だが、男性も多様で困難を抱えている、または全ての男性を加害者として語ることが批判する記述があった。

7-2-2. 「男女平等」の考え方に問題がある

7-2-1 で扱った「ジェンダー規範に対する疑問・批判」よりも回答数が多かったのは、「女性差別」の考え方や、それに基づいて「男女平等」を目指す取り組みに対する批判・疑問を述べたもので、回答数は64であった。このサブカテゴリーの中で最も回答数が多かったのは、現在は「女性が優遇」されている、あるいは「男性が差別」されているとするもので、回答数は28であった。次に回答数が多かったのは、「男女の差異化は区別であり、差別ではない」とするもので、回答数は17であった。さらに、「男女の差別・区別はなくせない」とするものが5、「ジェンダーが過剰に問題化されている」、または「気にしすぎている」とするものが7あった。

まず、サブカテゴリーの中で一番多かった女性優遇・男性差別に関する記述を見てみると、28の回答数のうち、男性の回答が20、女性の回答が8と、男性の方がかなり多い。また、その詳細をみると、「女性専用車両」や「女性料金」を女性優遇の例として批判するものが全部で17あり、その内訳は、男性が14、女性が3と、女性専用車両やレディースデーといった女性割引に対する不満が男性に多いことがわかる。その内容をみると、理由は示さず「女性車両は不要だ」（2年次、男）や、「女性専用車両を作るなら男性専用車両も作るべきだ」（1年次、男）と意見を述べるものもあれば、痴漢防止目的で女性専用車両を作ることに理解を示しつつ、冤罪を防ぐために男性車両も作るべきとする意見が男女ともに見られた。元は、電車内の深刻な痴漢被害を軽減し、女性客が恐怖を感じずに電車を利用できることにすることを目的に設置された女性専用車両である。しかし、駅や車内で女性専用車両への「ご理解とご協力」を求めるアナウンスがなさ

れる一方、全ての人が安心して乗車できる、性暴力のない社内環境づくりへの「ご理解とご協力」については十分に言葉にして語られていないなど、その意義について十分に周知されているとは言い難い。また、メディアにおいても性犯罪の冤罪が大きく取り上げられる一方で、性暴力の多くが通報されずに被害者が泣き寝入りしていることが十分に語られているとは言い難い。「女性専用車両＝女性優遇・男性差別」という回答が多く見られることの背景には、こういった性暴力についてのメディアと広くは社会における言説がある。

次に回答数が多かった、「男女の差異化は区別であり、差別ではない」という主張全てに共通する点は、男女は生物学的に異なるのであるから、「区別」はあってしかるべき、あるいは仕方がないもので、それは「差別」ではないという考え方である。この趣旨の記述があったのは男性による回答が11、女性による回答が6であった。この立場を端的に表現した記述には、例えば以下のようなものがある。

僕は、男女差別という言葉を使うことが間違いだと思う。男と女というのは実際に違うもので、男にしかできないこと、女にしかできないことがあり、それをお互いに理解し尊重し合う必要があると思う。(3年次、男)

私個人としては、「男女平等の社会」という言葉に若干の疑問や、気持ち悪さを感じています。それはなぜかというと、差別という悪い意味ではなく、男性と女性というのは少なくとも別の性であり区別すべきものであると考えるからです。単純に女性が出来ることと、男性が出来ることに違いはあるし(1番分かりやすい点で言えば出産)まず何をもって平等としているのかがよく分かりません。(3年次、男)

これらの記述からは、「男女平等」を、女も男も個人差関係なく全く同じように扱うことであると捉えていることがうかがえる。個々の能力が異な

ることはいうまでもなく、様々な仕事や役割の割り振りは、個人の興味や経験、能力に応じて行われるべきで、単純に「男か女か」によって分けられるべきでないこと、ジェンダーによる割り振りによって男女の格差が生まれてきたことは、フェミニズムが常に訴え続けてきたことである。全ての人を画一的に扱うことがフェミニズムの目指す男女平等のビジョンであるという誤った理解は、2000年代のバックラッシュの時に広く拡散された言説であるが、この言説が現在の若い世代にも影響を与え続けていることが伺える。

最後に、ジェンダー問題について「気にしすぎている」、「敏感になり過ぎている」とする回答である。これらの回答には、その度合いは異なるが、「女性優遇」や「区別は差別ではない」という回答と同様にフェミニズムやジェンダー格差を問題にすることに対する抵抗感が現れている。このサブカテゴリーに分類された記述の数は6と少ないものの、興味深いことに全ての回答が女性によるものであった。例をあげると以下のようなものがある。

今、とてもジェンダーについて、考えたり学んだりする機会委が増えていて、理解するということはいいことだと思うけれど、少し気にしすぎな気がします。(1年次、女)

私は最近よく、動画などでジェンダー問題が騒がれているのを正直、女性側が騒ぎすぎたと考えている。些細なことに敏感になりすぎているのは女性側であって、その反応を面白がっていることもあると思う。(2年次、女)

これらの記述は、ジェンダー格差があることを多少ながら認める一方で、それを問題視するほど深刻な問題ではないとする。気にしていたら生きていくのがしんどいということの裏返しとも解釈できる一方で、差別により生きていくのがしんどいと訴える者の経験を女性自ら矮小化・無効化す

るものでもある。

7-2-3. セクハラ、ドメスティック・バイオレンスに関する疑問・主張

このサブカテゴリーは、上記のものと比較すると回答数は少なく、全部で8である。またその内容も、セクハラやドメスティック・バイオレンスを問題視するものと、ハラスメントの定義への疑問、あるいは「なんでもハラスメントに名前をつけすぎている」というハラスメントを問題化することへの抵抗を表明するものと多岐にわたり、ここでは傾向としてまとめることはせず、回答を記述するにとどめたい。

まず、これらのジェンダーに基づく暴力を問題視した記述には、「デートDV などについても、いい年して女性に手を上げるなど、まず男性に手を上げる事も普通はしない事なのに、するということもよく分からない」（1年次、男）や、「1人で生きていきたいのに結婚を強要するような人間が多いのは何故。そもそも母親がDV 紛いのことをされていては、異性と結婚したくないと思うのは当然では？」（2年次、女）などがある。これら2つの記述は、共に暴力を問題視する立場であるが、前者は「女性に手を上げるなど」と、女性は守られるべき存在として位置づけ、後者は家庭でDVを目撃したことで、女性として家を安全な場所、あるいは結婚が安全・安定を担保するものではないと認識するにいたったこと、したがって結婚をしたいと思わない女性がいるのは当然であることを主張するもので、内容は大きく異なっている。

ハラスメントの定義に対する疑問も、求める答えの内容が異なっている。まず、「ハラスメントかどうか判断が難しい」という回答が3ある。ハラスメント行為は日常生活で頻繁に行われ、フェミニズムによって問題として可視化されてきたものの、まだ受け手がどう感じたかに基づいてハラスメントかどうか判断することへの躊躇が伺える記述である。その例として、「バイト先の男性たちはお酒を飲むと性に関して極どい話、質問をしてくるのですがこれはセクシュアルハラスメントなのかと疑問に思っています。」

(1 年次、女) や、「セクハラやチカンは境界が難しいと思う。」(1 年次、女) といった記述があげられる。

また、「何でもセクハラとかモラハラとかハラスメントに名前をつけすぎと思いました。」(1 年次、女) といった回答に見られるように、ハラスメント被害を矮小化する、あるいはそこから距離をおこうとする記述もみられた。これは様々な迷惑・いやがらせ・暴力行為について「～ハラスメント」という名前が付けられたことで、日常に溢れながら見過ごされてきた問題が可視化、問題化されるようになったという重要な意義を見過ごしていると切り捨てることは簡単である。しかし、人生経験が浅い学生たちがこういったハラスメントを将来的に自分が直面するかもしれないこと、その時に「ハラスメント」という認識の枠組みが問題解決に向けて重要な役割を果たすことを認識できるような語りが求められているのかもしれない。

7-3. セクシュアリティに関する疑問・主張

セクシュアリティに関する疑問・主張もその内容は多岐に渡り、全体で 87 の回答があった。そのうち、性的指向や性自認 (SOGI) に基づいた差別があることを支持する、あるいは差別解消を目指す人権運動に懐疑的な記述は 6 で、それ以外は SOGI や性一般に関する疑問や関心を示す内容であった。本節では、これらの記述を 7-3-1) SOGI に基づく差別に対する疑問、7-3-2) 同性婚に関する疑問・支持、7-3-3) SOGI に関する疑問、7-3-4) 性別二元制への疑問、7-3-5) SOGI に基づいた人権運動への抵抗・懐疑、の 5 項目にまとめて考察する。

7-3-1. SOGI に基づく差別に対する疑問

セクシュアリティに関する疑問・主張の中で圧倒的に記述が多かったのが、SOGI に基づく差別に対する疑問で、「同性婚」に関する記述を除くと全部で 32 あった。その大半が「なぜ同性愛の人を差別するのか分からない」や、「SOGI に基づいた差別はすぐになくなるべきだ」、「どうすれば SOGI

に基づいた差別をなくせるのか」という、SOGIに基づいた差別は誤りで、解消されるべきであるとするものである。女性差別問題の記述と比較すると、SOGIに基づいた差別が「存在しない」あるいは「気にしすぎ」、「性的マイノリティを優遇している」といった記述は見当たらなかった。これは特に近年「LGBT」や「SOGI」が広く差別問題として取り上げられることが多くなり、特に若い世代を中心にその認識が急速に変化していることを示している。

「なぜ差別するのか分からない」、「差別は誤りである」という記述には、差別への強い嫌悪感が表されているものも多い一方で、「同性愛者などに偏見を持ったり、少し他の人とは違う目で見えてしまうのはまだわからなくても、差別に至るのはよく分からない」（1年次、男）や、「同性愛などについて私はダメだとは思わないし、個人の自由じゃないかと思います。でも、全く気持ち悪いとかマイナスなイメージがないかと言うと、少しそう感じてしまっている部分はあると思います。」（1年次、女）といった記述に見られるように、心のどこかで違和感や「気持ち悪い」という感覚を持っていることを認める記述もある。差別は悪いことである、という認識と SOGI に基づいた偏見は「差別」であり、問題であるという認識に向き合いつつあるという変化を示す記述で興味深い。

他にも、SOGI に基づいた差別は良くないことであると認識しながらも、何が差別にあたるのか分からないというまどいを示す記述がいくらか見られた。例えば、「LGBT への差別をなくすべきなのはわかるが、どこからが差別なのか、『おかま』『ホモ』などの言葉を悪意がなくても使うべきでないのか、など疑問に思う。」（1年次、女）といった記述である。他にも、「自分はそうでなくても気づかぬうちに相手を傷つけてしまう言葉言ってしまうのでは」（3年次、男）という自省的記述が見られたことは、差別問題の認識の広がりや変化の希望を持たせてくれるものである。

7-3-2. 同性婚に関する疑問・支持

前項で示したSOGIに基づく差別に対する問題意識や人権意識の変化は、同性同士の結婚に関する記述にも現れている。「同性婚」について記述のあった回答は14あり、1つを除いて全て同性婚を支持するものであった。これは、様々な調査で日本の若い世代の過半数が同性婚を支持していることが示されていることと一致している。

これらの同性婚を支持する回答の中には「なぜ同性婚が認められないのか疑問である」というシンプルな問いもあれば、「結婚は当事者間で決めるものであり、他者が口出しする問題ではない」という個人主義的立場からの指示も散見された。また、14のうち、「日本」という言葉を使ったものが6あり、「同性婚を認めていない日本は遅れている」といったように他国と比較するものもあった。

また、この中には2018年の自民党の杉田水脈議員によるLGBTに対する差別発言に通じる言説を批判する回答もあった。例えば、以下の記述では、「子供を産まないLGBTは、生産性がない」という主張を真っ向から否定している。

例えば同性での結婚を認めると子供が減るから良くないという意見があるが、子供を増やすのなら子育て世代や若者への支援をすれば確実に今よりは増えると思うが、セクシュアルマイノリティを非難する場合その辺りはほとんど引き合いに出されないように思う。育児放棄や子を殺害するような男女カップルがいる中、子供の数を気にして同性婚を認めないというのはおかしい話であると思う。(1年次、女)

子供を産み育てるかどうかの議論になった時に、同性同士でも精子の提供や代理母、養子縁組を通じて子供をもつカップルを引き合いに出す議論もみられるが、そういった議論は仮に同性同士のカップルが子供を産み育てない（産み育てられない）場合は差別してもよいという議論にも通じかね

ない問題がある。しかし、上記の記述は、少子化問題は子育て世代の経済的困窮が原因であり、セクシュアルマイノリティを問題にすべきではないとし、問題含みの主張に加担していない点は興味深い。

7-3-3. SOGI に関する疑問

SOGIに関する疑問は、差別する気持ちや制度問題ではなく、「どうして人は同性の人を好きになるのか」、「いつ同性の人を好きになることに気づいたのか」、「心の性とは何か」、「なぜトランスジェンダーが存在するのか」といった SOGI の概念や性的マイノリティの存在そのものや経験に関するものである。これらの問いは、多様な SOGI のあり方について理解を深めたいという気持ちが表現されている一方で、異性愛、シスジェンダーが「普通」「自然」なあり方で、同性愛やトランスジェンダーはそうではないという認識も垣間見える。

また、このサブカテゴリーの中で、いわゆる MtF に比べて、FtM トランスジェンダーがメディアに登場することが少ないことについて疑問を呈する回答が2つあった。かつての「おかま」や近年の「おねえ」キャラクターがメディアで多く活動する一方、対となるはずの「おなべ」キャラクターはメディアにほとんど出てこず、「おにい」キャラクターなるものはメディアに存在していない。「トランスジェンダー」が社会である程度知られるようになって、「特定」のトランスジェンダーしか可視化されていないことは、もっと多く議論されてもいいだろう。

7-3-4. 性別二元制への疑問

性二元制の問題を問う回答は、全部で5あった。そのうちの3つは、様々な書類の性別欄が「男・女」の2つしかないことの問題を指摘するものであった。例えば以下のような記述である。

性別を「男」「女」というように二分化することにより、どちらにも当

てはまらないセクシュアルマイノリティーたちの行き場が無くなって
しまうのに役所での書類など公的な手続きを踏む際から学校での男女
分けグループまで、「男」「女」に二分化することに疑問を感じる。(1
年次、女)

この記述の中で述べられている「どちらにも当てはまらない」人とは、ジェンダー・クイアやXジェンダーの人などを指すと思われるが、それをセクシャルマイノリティとして記述しているのは、性的指向と性自認の概念を区別していない、あるいはできていないからだと思われる。と同時に、性別二元制が「公的な手続き」から「学校での男女分けグループまで」、社会の隅々まで行き渡り、男女の枠組みに当てはまらない人たちを様々な形で排除していることに思い至っている。また、2-1 で取り上げた「その他」の性別の学生の記述は、性別二元制と性規範が具体的にいかにあいまってトランスジェンダーを始め、性自認がシスジェンダーとは異なる人の人生を生きづらいものになっているかを示す貴重な証言である。

7-3-5. SOGI に基づいた人権運動への抵抗・懐疑

回答数としては少ないものの、近年 SOGI に基づいた差別を問題化されてきたことに対する抵抗感や、その人権運動のあり方に懐疑的な味方を示す回答が6あった。その内容を見てみると、まず、「性的マイノリティであることを声高に主張するべきではない」とするものがある。これは、異なる SOGI を理由に人を虐げることはよくないが、あくまで人間は生き物であり、子孫を残すのが本能であるから、「普通」の人に受け入れを要求するのは間違いであるという典型的な同性愛嫌悪の言説であり、現状として存在する差別を支持する立場である。

もう1つ、差別を支持する立場として、差別であると非難するのを恐れて「自由に発言ができていく世の中になるのではないか」(1年次、女)という回答がある。これは、差別を受ける側の苦しみよりも、「差別をした」

と責められることを心配しなければいけない「不便さ」をより問題視するもので、結果として差別発言を容認することにつながる考え方である。これは、セクハラが問題視されるようになったことについて、相手に不快な思いをさせるものも含めて自由な発言や会話ができなくなることの「不自由さ」を嘆く言説と同様に、差別する側（加害者）の権力性を示すものといえる。

さらに、「差別されていると教えるから違う目でみるようになる」ので、意識する方が生きづらさの元になるのではないか、という記述も、差別が可視化、あるいは認知されることに対する抵抗として作用する点で、「自由な発言」を心配する言説と類似している。性的指向や性自認そのものは、あえて言葉や行動で表現しない限り目には見えないものである。故に、異性愛とシスジェンダーが「普通」で、それ以外のものが存在しないことにされている場合、その差別自体もなかなか可視化されず、性的「マジョリティ」の立ち位置から見ると、性的マイノリティは「見えない」「認識されない」存在となるだけであり、差別が存在しないことを示すものではない。また、歴然とした差別が存在する現状で、「教えられるまで差別される存在とも認識していなかった」という見方は、マイノリティであっても幸運にもこれまでずっと差別経験なく大学生になるまで生きてきた「ラッキーな人」であるか、気づかずにいられた性的マジョリティの特権的立ち位置を示しているにすぎない。

7-4. 学校教育に関する疑問・主張

最後に、学校教育における問題点や要望を記述した回答を取り上げる。大学の授業を通じて問題に気づいた、関心を持つようになったとする回答も3あったが、ジェンダーやセクシュアリティの問題について学ぶ機会が不足している、学校教育の場でもっと学べる場を作りたいという回答の方が20と圧倒的に多い。幼少期から教えるべきだとするものもあれば、高校や大学で学ぶ場が欲しいとするものまで、ジェンダーとセクシュアリ

ティについての教育をいつ頃行うべきかについての意見は多様である。しかし、共通して述べられているのは、「大切な時期に学べていない」という思いではないだろうか。

また、大学の中でもジェンダーやセクシュアリティの問題を取り扱う授業が少ないという記述もいくつか見られる。こういった授業が少しずつ増えつつあるとはいえ、ラッキーな少数の学生のみが学習機会を得るのではなく、全ての人の暮らしの根幹にあるジェンダーとセクシュアリティの問題について、本学でもより広く学びの機会が提供されるべきであろう。

もう一点、このカテゴリーにあたる回答が指摘している問題に、大学も含めた学校教育における性別二元制の問題がある。例えば、教員が男子学生と女子学生に対して明らかに異なる接し方をすることや、学校のトイレなどの施設が男女で分けられ、誰でも使える個室がないことである。確かに本学の施設を見ても、いわゆる「誰でもトイレ」は設置されていない。いくら授業で多様なジェンダーやセクシュアリティについて教えても、大学施設そのものが性別二元制を維持・強化していたのでは、学生たちは納得できないだろう。これは、大学教員によるパワハラ、セクハラも同様である。

7-5. まとめ

自由記述の問20への回答からは、ジェンダーやセクシュアリティに基づいた差別や暴力に対する問題意識と関心の高さが見えてきた。同時に、「フェミニズム」や「LGBT」がブームとさえいわれる今日でも、問題を矮小化したり、「逆差別」や「過剰反応」といった言葉でやっと聞こえてきた声を抑え込もうとしたりする言説がみられたことは、本学においてジェンダーとセクシュアリティの問題を授業の内外で取り組んでいくことの重要性を示している。

また、本節では回答数が比較的多いテーマを優先的に、かつ幅広く取り上げて記述・考察してきたが、この節で取りあげることのできなかったテ

ーマや意見・疑問も数多い。そして、SOGI についてだけでなく、性全般に関する率直で多様な疑問も、現在の大学生の性に関する認識や態度を示すデータとして大変興味深い。さらに、多様なジェンダー、セクシュアリティに関する認識や態度について、世代差を指摘する記述が見られ、今の若い世代が上の世代との認識の差を感じていることが伺える。

人も情報もどんどんと国境を超え、めまぐるしく変化していく一方で、一見昔と変わらない保守的な性規範を支持する意見もあった。多様化し、複雑化する今日の社会で、大学教育が学生たちの関心や経験、ニーズに対応しながらジェンダー・セクシュアリティに関する研究を進め、その知見に基づいた教育と大学作りが求められている。

(井谷聡子)

8. 過去調査から変化したもの

本節では、過去調査からの継続項目で、結果に大きな変化があった「性別役割分業」と「結婚」に関する項目をとりあげ、その変化の状況をみていく。

8-1. 身近な性別役割分業

93年調査からの継続項目として、サークルの合宿で女子だけが後片付けしている場面で、「男子もやるべき」という A 子と、「男子にやってもらなくてもいい」という B 子のうち、どちらの意見に近いか問う項目がある（今回調査の間 6）。その変化をみると、特に男子で顕著に「男子もやるべき」とする A 子の意見に賛同する人が増加していることがわかった（図 19）。自分の意見が A 子に近とする男性（どちらかという A 子も含む）は、93年には65.4%であったのに対し、02年には74.7%、08年82.8%、17年には85.3%に達した。

また、あなたのまわりの実際の後片付けの状況をたずねた項目について

は、男女とも顕著に「男女同じように」と答える人が増加していた（図20）。男性についていえば、「男女同じように」と答えた割合は、93年の39.8%から年々増加し、17年には71.7%に達している。女性についても93年の31.2%から、近年の変化はゆるやかなものの、17年には59.6%へと増加している。ただし、この項目については、男女のギャップが残存している。実際の食事の後片付けの状況について、それぞれの年度を男女で比較すると、すべての調査年度で女性よりも男性のほうが「男女同じように」と答えている人の割合が高く、「女性が中心」と答えた人の割合が低い。同じ場を共有しているはずの男子学生と女子学生で、なぜ回答にこのような異なる傾向がみられるのだろうか。これは、男子学生が男女同じようにやっているつもりでも、女子学生にとっては「女子が中心」と感じられるような場面が存在していることを示しているのではないか。

図19 「食事の後片付けについての自分の意見」の変化

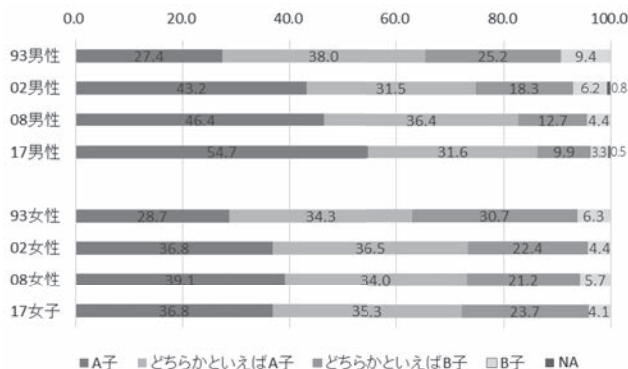
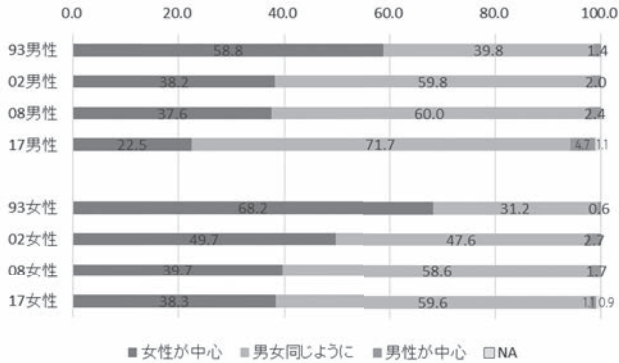


図20 「食事の後片付けの実際」の変化



8-2. 結婚観

本調査全体を通じて、もっとも顕著な変化が見られたのが、結婚に対する考え方である。第一に、「結婚はこうあるべき」とする規範が弱まりつつあることがうかがえた。

図21は、「誰でも人は結婚するほうがいい」（今回調査の間8（4））という項目について、08年調査と17年調査の結果を示したものである。「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、男性については08年の58.0%から17年の47.3%へ、女性についても47.0%から36.1%へと大きく減少していた。

図22は、「結婚したら、子どもを持つのは普通だ」（今回調査の間8（5））という項目の変化を示したものである。この項目についても、「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、男性については08年の69.8%から17年の54.1%へ、女性についても51.2%から39.5%へと大きく減少していた。

図23は、「結婚したら、なるべく離婚すべきではない」（今回調査の間8（6））という項目の変化を示したものである。この項目について、「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、男性については08年の

83.1%から17年の78.6%へ、女性についても75.2%から73.3%へと、減少傾向がみられた。

高度経済成長期に一般化した「誰もが結婚をし、子どもを持つ」といった結婚規範や、結婚は一生に一度とするロマンチック・ラブ・イデオロギーが、この10年で弱まりつつあることがわかる。

図21 「誰でも人は結婚するほうがいい」の変化

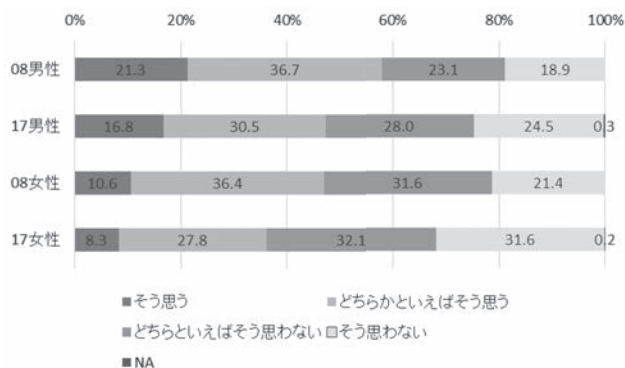


図22 「結婚したら子どもを持つのは普通だ」の変化

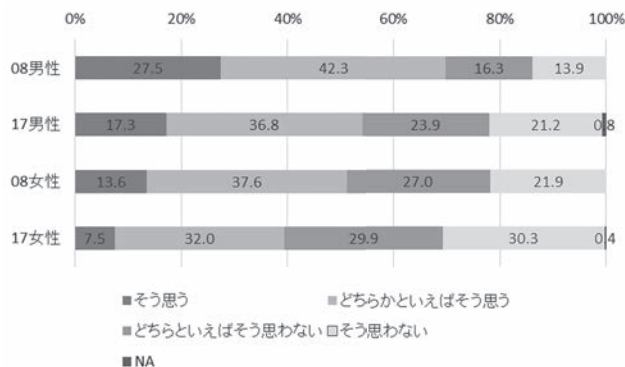
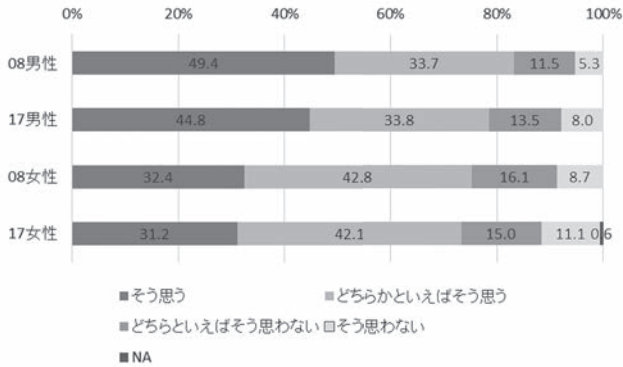


図23 「結婚したらなるべく離婚すべきではない」の変化



第二に、多様な家族のあり方を認める人が増加傾向にあることも明らかになった。

図24は、「同性どうしの結婚は法律で認められるべきだ」（今回調査の問8（9））という項目についての変化を示したものである（ただし、この項目は、08年調査においては、「同性同士の結婚も認められるべきだ」という設問で、言葉が少し異なっていることに注意されたい）。この項目について、「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、男性については08年の48.8%から17年の68.7%へ、女性についても75.7%から88.4%へと、大きく増加していた。

また、図25は、「夫婦別姓は法律で認められるべきだ」（今回調査の問8（8））という項目についての変化を示したものである（この項目も、08年調査においては、「夫婦別姓は認められるべきだ」という設問で、言葉が少し異なっていることに注意されたい）。この項目について、「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、女性についてはあまり大きな変化はみられなかったが、男性については08年の50.4%から17年の54.4%へと増加していた。

図24 「同性同士の結婚は（法的に）認められるべきだ」の変化

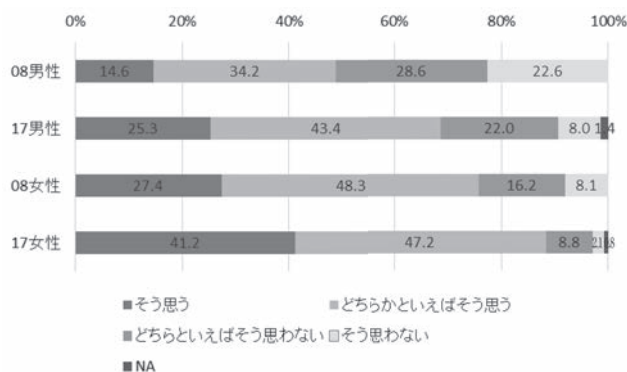
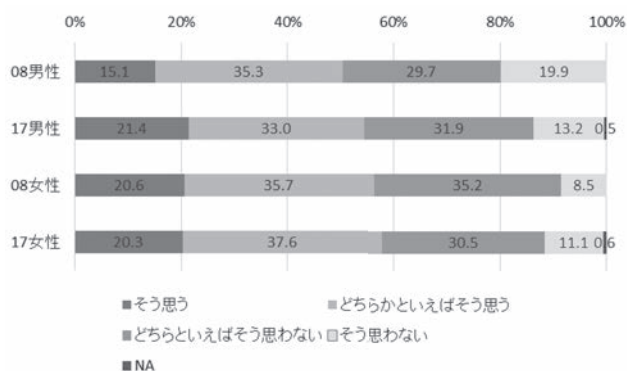


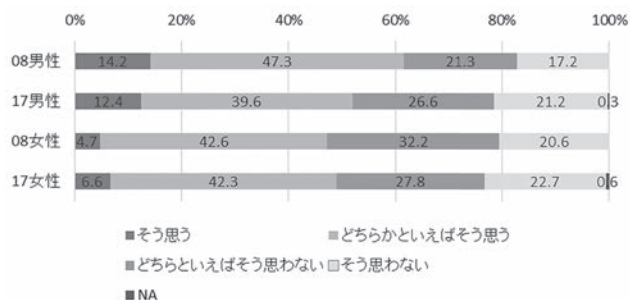
図25 「夫婦別姓は法律で認められるべきだ」の変化



「結婚はこうあるべき」とする規範が弱まりつつあるのに対し、家庭における性別役割分業に関する意識については、より複雑な状況を示している。図26は、「結婚後は夫が外で働き、妻は家庭を守るのが望ましい」（今回調査の問8（1））という項目の変化を示したものである。この項目について、「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、男性については08年の61.5%から17年の52.0%へと減少している。他方、女性について

は「そう思う」と答えた人も、「そう思わない」と答えた人も増加し、両極の意見が増加傾向にあるといえる。また、このような変化の結果、男女の回答が平準化しつつあることも興味深い。

図26 「結婚後は夫が外で働き、妻は家庭を守るのが望ましい」の変化



8-3. その他の項目

表2 母親の就業形態

	2008女性	2017女性	2008男性	2017男性
フルタイム	19.3	22.4	16.9	22.5
自営業	6.4	9.6	4.4	8.0
パートタイム	41.7	43.2	44.1	45.3
仕事はしていない	30.7	21.4	32.2	21.7
その他	0.6	0.8	0.9	0.0
母はいない	0.4	0.8	0.9	0.5
無回答	0.8	1.9	0.6	1.9

上記以外の項目で、顕著な変化がみられたものが、母親の就業形態を問う項目（今回調査の問2（b））である（表2）。2017年調査を2008年調査と比べたとき、男女とも、母親が「フルタイム」・「自営業」・「パートタイム」で働いていると答えた人の割合がすべて増加している。他方、母親が

「仕事はしていない」と答えた人は、女性については08年調査の30.7%から17年調査の21.4%へ、男性についても08年調査の32.2%から21.7%へと、大幅に減少している。男女とも、パートタイムで働く母親が最も多いが、専業主婦の母親よりも、フルタイムで働く母親の割合が上回る結果となった。

このような変化は、学生の結婚観や性別役割分業に関する意識に影響を与えているのだろうか。また、そのほかにこれらの意識に影響を与えているものはないのだろうか。学生のジェンダーをめぐる意識についてのさまざまな検討は、今後の研究課題としたい。

(守 如子)

注

- 1) 調査メンバー(執筆担当部分): 石元清英(はじめに)、宮前千雅子(問16)、酒井千絵(6節)、井谷聡子(7節)、守如子(8節)、宮田りりい(補論)、多賀太
- 2) 郵送調査とWEB調査で異なる傾向がみられた項目としては、問7(2)食器を洗う(WEB調査のほうがよくしている人が多かった)、問8(9)同性同士の結婚は認められるべきだ(WEB調査のほうが認めるべきと答えた人が多かった)などがあるが、なぜこのような違いがでるのかについては、今後の検討課題としたい。

補論 LGBT に関する質問項目について

宮 田 りりい

1. はじめに

今回の調査から、新たに LGBT に関する質問項目を追加した。LGBT とは、Lesbian（レズビアン）、Gay（ゲイ）、Bisexual（バイセクシュアル）、Transgender（トランスジェンダー）の頭文字を取った言葉であり、またこれら 4 つに限定されない多様な性のあり方の総称としても用いられる言葉である。日本では、2010 年代前半頃からメディアを通して世間に浸透するようになり、近年では 10 年ぶりの改訂となった岩波書店の『広辞苑』（第 7 版）に新たに収録されたことでも注目を集めた。

教育の領域においては、たとえば内閣府（2012）が『自殺総合対策大綱』の中で「自殺念慮の割合等が高いことが指摘されている性的マイノリティについて、無理解や偏見等がその背景にある社会的要因の一つであると捉えて、教職員の理解を促進する」（p.16）と述べ、さらに文部科学省（2016）が『性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）』を作成・公表するなど、差別や偏見に対して脆弱な状況に置かれやすい LGBT の児童生徒に対する支援が注目され、また国による取組みも進められるようになった。

しかしながら、主として上記の取組みでは、性同一性障害に係る児童生徒に対する支援、すなわち医学概念にもとづく個人モデルを採用した支援が中心化される傾向にある。そのため、特別な生徒に対する特別な配慮が強調される一方、（性別二元論や異性愛中心主義にもとづく）固定的な性のあり方を当然視したり、それを個人に押しつける社会のあり方について十

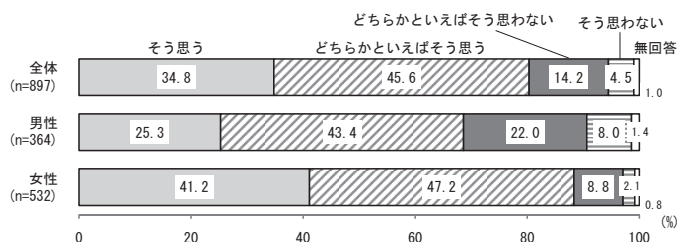
分問い直されない懸念がある。

以下では、今回の調査における LGBT に関する質問項目への回答結果及び、2015 年に実施された全国調査（釜野ら 2016）と今回の調査との比較について確認した上で、それらをもとに、多様な性のあり方の尊重に向けた本学の課題について考えていきたい。

2. LGBT に関する質問項目への回答結果

1) 同性婚

図 8-9：同性どうしの結婚は法律で認められるべきだ

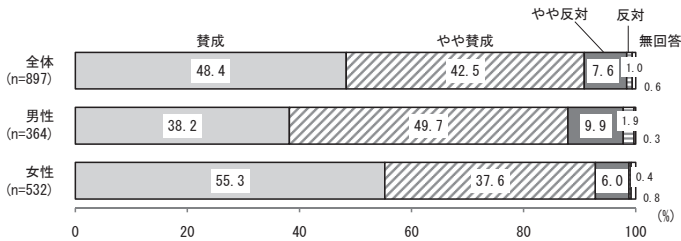


問 8-9 では、同性婚について質問を行った（図 8-9）。まず、「同性どうしの結婚は法律で認められるべきだ」という意見について、全体では「どちらかといえばそう思う」が 45.6% で最も多く、次いで「そう思う」が 34.8% となっており、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた肯定派は 8 割を占めている。また、性別で見ると、男女とも「どちらかといえばそう思う」が最も多く、肯定派は男性が 7 割、女性が 9 割を占めている。次に、釜野らによる全国調査の結果では、同様の質問について、賛成派が 5 割、反対派が 4 割となっており、今回の調査の結果とは大きく異なるものであった。ただし、全国調査の結果を年代別に見ると、年代が

低くなるほど肯定的な割合が高くなっており、とりわけ20～30代では全体の7割が賛成派を占め、今回の調査に近い結果となっている。

2) 同性愛と教育

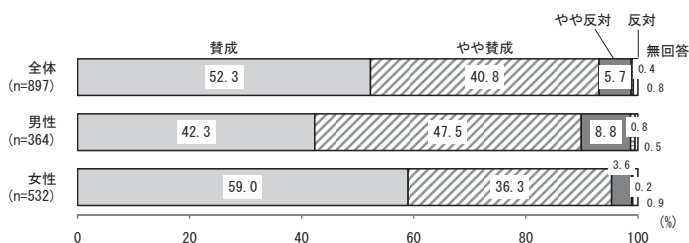
図 9-1：同性愛という性のあり方があることを、義務教育で教えること



問 9-1 では、同性愛と教育に関する質問を行った（図 9-1）。まず、「同性愛という性のあり方があることを、義務教育で教えること」について、全体では「賛成」が48.4%で最も多く、次いで「やや賛成」が42.5%となっており、両者を合わせた賛成派が9割を占めている。次に、釜野らによる全国調査の結果では、同様の質問について、全体で賛成派が5割、反対派が4割となっており、今回の調査の結果とは大きく異なるものであった。ただし、全国調査の結果を年代別に見ると、年代が低くなるほど賛成派の割合が高くなっており、とりわけ20～30代では賛成派が全体の7割を占め、今回の調査の結果により近いものとなっている。

3) トランスジェンダーと教育

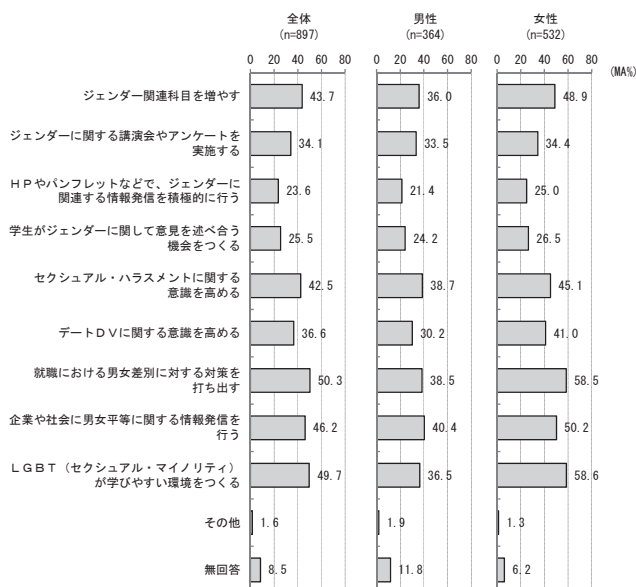
図 9-2：トランスジェンダーについて、義務教育で教えること



問 9-2 では、トランスジェンダーと教育について質問を行った（図 9-2）。まず、「トランスジェンダーについて、義務教育で教えること」について、全体では「賛成」が52.3%で最も多く、次いで「やや賛成」が40.8%となっており、両者を合わせた賛成派が9割を占めている。次に、釜野らによる全国調査の結果では、同様の質問について、全体で賛成派が4割、反対派が5割となっており、今回の調査の結果とは大きく異なるものであった。ただし、全国調査の結果を年代別に見ると、年代が低くなるほど賛成派の割合が高くなっており、とりわけ20～30代では賛成派が全体の7割を占め、今回の調査の結果により近いものとなっている。

4) 大学の課題

図18-1：大学が今後、ジェンダーやセクシュアリティに関して取り組むべき課題



問18-1では、大学が今後、ジェンダーやセクシュアリティに関して取り組むべき課題について質問を行った（図18-1）。まず、全体では、「就職における男女差別に対する対策を打ち出す」が50.3%で最も多く、次いで「LGBT（セクシュアル・マイノリティ）が学びやすい環境をつくる」が49.7%となっている。また、性別でみると、男性は「企業や社会に男女平等に関する情報発信を行う」が40.4%で最も多く、次いで「セクシュアル・ハラスメントに関する意識を高める」が38.7%となっている。一方、女性は「LGBT（セクシュアル・マイノリティ）が学びやすい環境をつくる」が58.6%で最も多く、僅差で「就職における男女差別に対する対策を打ち出す」が58.5%となっている。なお、釜野らによる全国調査において、同様の質

問項目はなかったため、ここでは今回の調査との比較は行わない。

3. さいごに

以下では、これまでに得られた結果を大きく2つの観点から改めて確認した上で、今後の本学における課題について述べていく。

まず、全国調査と今回の調査との比較という観点から見れば、前者よりも後者の方が、LGBTに対する否定的な意識が低いという結果であった。なお、全国調査において見られた、「回答者の年代が下がるほど否定的な意識が低くなる」という傾向を踏まえれば、上記の結果は全国調査の回答者たち（20～59歳）よりも、今回の調査の回答者たち（大学1・3年生）の方が、相対的に年齢が低かったためであると考えられる。

次に、今回の調査結果における、性別での比較という観点から見れば、同性愛について義務教育で教えることに「賛成」と回答した男性は4割、女性は6割であり、さらに、トランスジェンダーについて義務教育で教えることについても同様の結果であった。また、大学の課題として挙げた、「LGBT（セクシュアル・マイノリティ）が学びやすい環境をつくる」という項目に対して、男性よりも女性の方が2割多く選択していた。

さいごに、以上の結果を踏まえた今後の本学における課題として、性的指向や性自認、性表現、性的特徴といった、性のあり方の多様性に関する全学的な指針の策定について述べておきたい。たとえば、大阪府立大学による「SOGI (Sexual Orientation and Gender Identity) の多様性と学生生活に関わるガイドライン」(2017) や、大阪大学による『『性的指向 (Sexual Orientation)』と『性自認 (Gender Identity)』の多様性に関する基本方針」(2017) など、性のあり方の多様性に関する全学的な指針（または方針）を示している大学がすでに存在する一方、本学では未だこうした指針が示されていない。今回の調査では、学生たちの大半がLGBTに関して肯定派だったものの、LGBTが学びやすい環境をつくることを大学の課題として回

答した学生は全体の5割であり、さらに年代が上がるほど否定派が増える傾向にあった全国調査の結果を踏まえれば、今後は学生たちが性のあり方に関わらず安心して大学生活を送るための環境整備をよりいっそう進めるだけでなく、日々学生たちに接する教職員等に向けた啓発の実施も求められる。そして、これらの取組みを大学全体で進めていくために、まずは本学においても、性のあり方の多様性に関する全学的な指針の策定が必要であろう。加えて、ここでは、女性の方が男性よりもLGBTが学びやすい環境づくりに肯定的だったという、今回の調査結果についても触れておきたい。この結果の背景として、LGBTが直面しやすい困難と、女性が直面しやすい困難とが分かちがたく関連しており、それゆえ、女性の方が問題意識が高くなっている可能性が考えられる。性のあり方の多様性に関する取組みを進めていくことは、特別な学生の問題などではなく、あらゆる学生に関わるものである。そのことに十分注意しながら、学生たちが安心して過ごせる大学づくりに向けて、性のあり方の多様性に関する取組みを進めて行くことが求められる。

〈参照〉

- 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也, 2016, 『性的マイノリティについての意識—2015年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるティア・スタディーズの構築」研究グループ（研究代表者 広島修道大学 河口和也）編
- 内閣府, 2012, 「自殺総合対策大綱～誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して～」(<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/honbun.pdf>, 2018年10月5日確認)
- 文部科学省, 2016, 「性同一性障害や性的指向・性自認に係る, 児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/04/_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369211_01.pdf, 2018年10月5日確認)

第5回（2017年） 関西大学学生のジェンダー意識調査

関西大学人権問題研究室

アンケートご協力をお願い

関西大学人権問題研究室ジェンダー研究班では、1987年以来、関西大学学生のジェンダーに関する意識調査に取り組んできました。大学生の性別や性に関する考え方を明らかにすることによって、大学におけるジェンダー教育に役立てることを目的としています。

関西大学の1年次生と3年次生全体から無作為抽出した結果、あなたにお願いすることになりました。この調査は、無記名の調査で、結果は統計的に処理されますので、誰がどのように応えたかは知られることはありません。ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

★ 回答について ★

1. 調査用紙には名前を書かずに答えてください。
2. 答えは、あてはまる番号に○をつけてください。その他を選んだ方は（ ）に具体的に記入してください。
3. 答えたくない質問には、回答しなくてもけっこうです。
4. 記入後は、同封の返信用封筒で **11月13日** までに返送してください（切手は不要です）。

問い合わせ： 関西大学人権問題研究室（電話 06-6368-1182）

問1. (a) あなたの学年を教えてください。(○はひとつ) [1年 ・ 3年]

(b) あなたの性別は、次のうちどれにあてはまりますか。(○はひとつ)

[1. 男性 2. 女性 3. その他]

(c) あなたの今の居住形態は次のどれにあてはまりますか。(○はひとつ)

[1. 単身で住んでいる 2. 家族と同居している 3. その他]

(d) あなたの出身中学は次のどれにあてはまりますか。

[1. 共学 2. 男子校または女子校 3. その他]



「1. 共学」の場合 ⇒ 学級名簿は次のいずれのタイプでしたか。

[1. 男女混合名簿 2. 男女別名簿 3. わからない・忘れた]

(e) あなたの出身高校は次のどれにあてはまりますか。

[1. 共学 2. 男子校または女子校 3. その他]



「1. 共学」の場合 ⇒ 学級名簿は次のいずれのタイプでしたか。

[1. 男女混合名簿 2. 男女別名簿 3. わからない・忘れた]

(f) あなたはこれまでに留学または海外での生活経験がありますか。ある場合には、すべての期間を合わせた年月と、行き先のすべての国名もご記入ください。

[1. ない 2. ある]



「2. ある」場合 ⇒ () 年 () か月 (行き先:)

問2. あなたのご父母についてお聞きします。それぞれについて、もっともあてはまるものひとつに○をつけてください。

(a) 小学校低学年のとき、あなたのお母さんは働いていましたか。

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| 1. フルタイムで雇用されていた | 2. 自営業・自由業（フリーランス）の仕事をしていた |
| 3. パートタイムで雇用されていた | 4. 仕事はしていなかった |
| 5. 母はいなかった | 6. その他 () |

第5回(2017年) 関西大学学生のジェンダー意識調査

(b) **現在**、あなたのお母さんは働いていますか。(○は一つ)

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| 1. フルタイムで雇用されている | 2. 自営業・自由業(フリーランス)の仕事をしている |
| 3. パートタイムで雇用されている | 4. 仕事はしていない |
| 5. 母はいない | 6. その他 () |

(c) **小学校低学年**のとき、あなたのお父さんは働いていましたか。(○は一つ)

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| 1. フルタイムで雇用されていた | 2. 自営業・自由業(フリーランス)の仕事をしていた |
| 3. パートタイムで雇用されていた | 4. 仕事はしていなかった |
| 5. 父はいなかった | 6. その他 () |

(d) **現在**、あなたのお父さんは働いていますか。(○は一つ)

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| 1. フルタイムで雇用されている | 2. 自営業・自由業(フリーランス)の仕事をしている |
| 3. パートタイムで雇用されている | 4. 仕事はしていない |
| 5. 父はいない | 6. その他 () |

問3. あなたの大学卒業後の理想のライフプランに最も近いものを次の中から1つだけ選んでください。

1. 結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに働き続ける(育児休業取得を含む)。
2. 結婚や子どもの誕生を機にいったん退職し、子育て後に再就職する。
3. 結婚や子どもの誕生を機に退職し、その後は就職しない。
4. 仕事は持たない。
5. その他 ()

問4. あなたの将来の結婚相手やパートナーに期待するライフプランに最も近いものを次の中から1つだけ選んでください。

1. 結婚しても子どもが生まれても仕事を辞めずに働き続けてほしい(育児休業取得を含む)。
2. 結婚や子どもの誕生を機にいったん退職し、子育て後に再就職してほしい。
3. 結婚や子どもの誕生を機に退職し、その後は就職しないでほしい。
4. 仕事は持たないでほしい。
5. 結婚するつもりはない(特定のパートナーをもつつもりはない)。
6. その他 ()

第5回（2017年） 関西大学学生のジェンダー意識調査

問8. 結婚に関する次のような意見について、あなたはどう思いますか。それぞれについてあなたの考えに
もっとも近い番号ひとつに○をつけてください。

1. そう思う	2. どちらかと いえばそう思う	3. どちらかといえ ばそう思わない	4. そう思わない
---------	---------------------	-----------------------	-----------

- | | | | | |
|----------------------------------|---|---|---|---|
| (1) 結婚後は夫が外で働き、
妻は家庭を守るのが望ましい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (2) 子どもが小さいうちは、
母親が家にいるのが望ましい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (3) 男性も育児休業や介護休業を
とるのが望ましい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (4) 誰でも人は結婚するほうがいい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (5) 結婚したら、子どもを持つのは普通だ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (6) 結婚したら、なるべく離婚すべきではない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (7) 結婚したら、自分の生き方が犠牲に
なるのは仕方ない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (8) 夫婦別姓は法律で認められるべきだ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (9) 同性どうしの結婚は法律で認められるべきだ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (10) 不倫をした人が社会的に
非難されるのは仕方ない | 1 | 2 | 3 | 4 |

問9. 高校までの学校教育に関する次のようなそれぞれの意見について、あなたは賛成ですか、反対ですか。
あなたの考えに最も近い番号にひとつに○をつけてください。

- | | 賛成 | やや賛成 | やや反対 | 反対 |
|--------------------------------------|----|------|------|----|
| (1) 同性愛という性のあり方があることを、
義務教育で教えること | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (2) トランスジェンダー（*注）について、
義務教育で教えること | 1 | 2 | 3 | 4 |
- *生まれたときに割り当てられた性別に違和感を覚える人を指す。
- | | | | | |
|-------------------------|---|---|---|---|
| (3) 中高の体育を男女共修で行うこと | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (4) 近現代に重点をおいた歴史教育を行うこと | 1 | 2 | 3 | 4 |

問 10. 世の中には次のような意見がありますが、あなたはどう思いますか。あなたの考えに最も近い番号に○をつけてください。(それぞれ○は一つ)

	1. そう思う	2. どちらかといえ ばそう思う	3. どちらかといえ ばそう思わない	4. そう思わない
(1) デートなどでは、男性が 金銭面の負担をするべきだ	1	2	3	4
(2) 恋人からは束縛されてもいい ・・・・・・・・	1	2	3	4
(3) 性的関係では男性がリードすべきだ	1	2	3	4
(4) 女性よりも男性の方が、性欲が強い・・・・・・・・	1	2	3	4
(5) 買春をする男性は非難されるべきだ	1	2	3	4
(6) 売春をする女性は非難されるべきだ・・・・・・・・	1	2	3	4
(7) 妊娠した高校生が退学処分に なるのは仕方がない	1	2	3	4
(8) 戦争に行くのは、男性であるべきだ・・・・・・・・	1	2	3	4
(9) 戦争中は性暴力が生じるのは仕方がない	1	2	3	4

問 11. もし戦争になったら、あなたは進んで自分の国のために戦うと思いますか。(○はひとつ)

1. そう思う
2. どちらかといえ
ばそう思う
3. どちらかといえ
ばそう思わない
4. そう思わない

問 12. あなたは、次の分野で男女の地位は平等になっていると思いますか。それぞれあなたの気持ちに最も近いものを1つだけお答えください。

	1. 男性の方が非常 に優遇されている	2. どちらかといえ ば男性の方が優遇されている	3. 平等	4. どちらかといえ ば女性の方が優遇されている	5. 女性の方が非常 に優遇されている
(1) 家庭生活	1	2	3	4	5
(2) 職場	1	2	3	4	5
(3) 学校教育の場	1	2	3	4	5
(4) 政治の場	1	2	3	4	5
(5) 法律や制度の上	1	2	3	4	5
(6) 社会通念・慣習 ・しきたりなど	1	2	3	4	5
(7) 社会全体	1	2	3	4	5

第5回（2017年） 関西大学学生のジェンダー意識調査

問13. (1)あなたは家庭で「男は男らしく、女は女らしく」とよく言われましたか。(○は一つ)

1. よく言われた 2. ときどき言われた 3. あまり言われなかった 4. まったく言われなかった

(2)あなたは「男は男らしく、女は女らしく」という言葉に反発を感じますか。(○は一つ)

1. 強く感じる 2. 少し感じる 3. あまり感じない 4. まったく感じない

問14 あなたは以下の項目について、どのくらいあてはまりますか。(それぞれ○は一つ)

	1. あてはまる	2. ややあてはまる	3. あまりあてはまらない	4. あてはまらない
(1) 自分と異なった意見を言う人とは、距離を置きたい	1	2	3	4
(2) インターネットでは、自分の考えと異なる書き込みは読まないほうだ	1	2	3	4
(3) 占いを信じるほうだ	1	2	3	4
(4) 自分の服装や持ち物が、仲間から浮いていないか気になるほうだ	1	2	3	4
(5) 体重を気にするほうだ	1	2	3	4
(6) 自分の容姿が気に入らない	1	2	3	4
(7) 強い人にひかれる（あこがれる）ほうだ . . .	1	2	3	4
(8) 意見が合わないことがあっても、対立するのは嫌なので、相手に合わせることが多い	1	2	3	4
(9) 自分の悩みや将来について、相談できる友人がいる	1	2	3	4
(10) 友人とは政治や社会問題などの話はしないようにしている	1	2	3	4

問15. あなたは、これまでに交際相手がいきましたか。当てはまる番号一つに○をつけてください。

1. 交際相手はいなかった

⇒ 1を選んだ方は、問17 にお進みください。

2. 交際相手がいいた (いる)



2を選んだ方は、問16 にお進みください。

問 16. 交際相手からの暴力被害についてお聞きます。複数の交際相手から暴力を受けた方については、あなたがより傷ついた経験の一つについてお答えください。

(1) あなたは、交際相手から次のようなことをされたことがありますか。AからDのそれぞれについてあてはまる番号一つに○をつけてください。

	1. まったく ない	2. 1～2度 あった	3. 何度も あった
A. 身体的暴行 (たとえば、なぐったり、けったり、物を投げつけたり、突き飛ばしたりするなどの身体に対する暴行)	1	2	3
B. 心理的攻撃 (たとえば、人格を否定するような暴言、交友関係や行き先、電話・メールなどを細かく監視したり、長時間無視するなどの精神的な嫌がらせ、あるいは自分もしくは自分の家族に危害を加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫)	1	2	3
C. 経済的圧迫 (たとえば、バイト代や貯金を勝手に使われる、デート代を無理やり払わされるなど)	1	2	3
D. 性的強要 (たとえば、嫌がっているのに性的な行為を強要される、見たくない画像／映像等をみせられる、避妊に協力しないなど)	1	2	3

↓
すべて1の方は

問 17

一度でも「あった」方は、問16の(2)へ

(2) あなたは、交際相手から受けたそのような行為について、だれかに相談しましたか。あてはまる番号
すべてに○をつけてください。

1. 公的な機関（DV相談センター、警察など）
2. 学校（教員、養護教員、学校カウンセラー、大学の相談室など）
3. 家族や親戚
4. 友人・知人
5. その他（ ）
6. だれにも相談しなかった

(3) あなたは、交際相手からそのような行為を受けたとき、どうしましたか。(○は一つ)

1. 相手と別れた ⇒ 1を選んだ方は、問17へ
2. 別れたいとは思わなかった ⇒ 2を選んだ方は、問17へ
3. 別れたいと思ったが、別れなかった

3を選んだ方は、問16の(4)へ

第5回（2017年） 関西大学学生のジェンダー意識調査

(4) あなたが相手と別れなかった理由は何ですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. 相手の仕返しが怖かったから
2. 相手には自分が必要だと思ったから
3. 周りの目が気になったから
4. 相手が別れることに同意しなかったから
5. 相手は変わってくれるかもしれないと思ったから
6. その他 ()

★学内では、大学学生相談室やハラスメント相談室などで、人間関係やハラスメント等に関する相談を受け付けています。

(詳細はHP もご覧ください。 <http://www.kansai-u.ac.jp/gakusei/conference/window/harassment/>)

【ここからは、すべての方がお答えください】

問 17 あなたはこれまで大学でジェンダーに関する科目を受講したことがありますか。(○は一つ)

1. ある
2. ない

問 18 ジェンダーやセクシュアリティに関して、大学は今後どのような取り組みをすべきだと思いますか。
取り組むべきだと考えるものすべてに○をつけてください。

1. ジェンダー関連科目を増やす
2. ジェンダーに関する講演会やアンケートを実施する
3. HP やパンフレットなどで、ジェンダーに関連する情報発信を積極的に行う
4. 学生がジェンダーに関して意見を述べ合う機会をつくる
5. セクシュアル・ハラスメントに関する意識を高める
6. デートDV に関する意識を高める
7. 就職における男女差別に対する対策を打ち出す
8. 企業や社会に男女平等に関する情報発信を行う
9. LGBT (セクシュアル・マイノリティ) が学びやすい環境をつくる
10. その他 ()

問 19 昨年、報告されたジェンダーギャップ指数（経済、政治、教育、健康の4分野の男女格差を数値化。下位ほど格差が大きいことを示す）では、日本は世界 144 か国中 111 位でした。あなたが日常生活で感じている男女格差からみて、この 111 位という日本の順位をどう考えますか。できるだけ具体的に書いてください。

問 20 ジェンダーやセクシュアリティに関して、あなた自身が疑問に思っていることはありますか。ご自由にお書きください。

★ご協力ありがとうございました。記入もれがないか、もう一度確認の上、同封の返信封筒で投函くださいますようお願いいたします。なお、調査の結果は『人権問題研究室紀要』（第 76 号）にて報告します。2018 年秋に図書館に配架されるほか、関西大学リポジトリで公開される予定です。

（関西大学リポジトリ <https://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/872>）